HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学文学研究院紀要，第164号，全1冊
Citation	北海道大学文学研究院紀要，164
Issue Date	2021-07-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82366
Type	journal
File Information	00_164_all.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 2434-9771

北 海 道 大 学

文学研究院紀要

第 164 号

北海道大学文学研究院

2021

ISSN 2434-9771

北 海 道 大 学

文 学 研 究 院 紀 要

第 164 号

北海道大学文学研究院

2021

目次

土地の記憶と未来を撮る
——露口啓二の写真——……浅沼敬子……一左

ドイツ語から見たゲルマン語（5）
——人称代名詞——……清水誠……一九左

『ほどほどの懸想』注解……後藤康文……一右

北大文学研究院紀要 164 （2021）

土地の記憶と未来を撮る
── 露口啓二の写真 ──

浅 沼 敬 子

0．はじめに─露口啓二の風景写真の背景

雑草の間からのぞく空，小石の上を流れる水，散り敷く落ち葉の下からのぞく木の根や石…。2007 年に露口啓二（1950 年～）のはじめた《On_沙流川》（のちに《on_sar》と改称）は，カメラを現場に直置きするといった「工夫」によって，通常の人間のそれではない「視点」で撮影された風景の写真群である〔図 1 〕。写真評論家の倉石信乃が露口の写真について書いた「人間的であるよりもむしろ，動物的な，つまりは/もしくは『精霊的な』もの」「獣じみた，化身じみた，気配のようなもの」という表現[1]が ── この言自体はこの《on_sar》ではなくこれに先立つ《ミズノチズ》シリーズについてのものだが ── 想起される。

《on_sar》の写真シリーズは，沙流川流域を，松浦武四郎が残した「東西蝦夷山川地理取調圖」をもとに露口が辿った写真記録集である。かつてアイヌの人々が狩猟や交易の中で各所につけた名を，武四郎が和人の表記であるカタカナで採取し，記録した。露口はそうして記録された名を辿って流域を撮影したのであり，その意味で同シリーズはいわば「歩行写真」ともいえる。じっさい，同シリーズにしばしば見られる地面にほど近い「視線」は，人間の眼というより足の高さから見られたもののようである。おそらくここには，土地に近接したいという写真家の願いがあるのだろう。露口が同写真群のタイトルを《On_沙流川》（沙流川に密着して）から《on_sar》へ変更した

10.14943/bfhhs.164.l1



図 1　露口啓二「パンケオタシユイ・pankeotasyu 2009」2009 年，カラー写真

のは，アイヌの音にいくぶんかでも近づきたいという思いがあったからという。たとえしばしば暴力的に奪われたとしても，土地，場所にはかつてそこにいた人々の営みの記憶を含めてさまざまな痕跡があり，その痕跡に密着したいという思いが，露口にタイトルの変更を決意させたと思われる。

露口は，依頼された仕事は別として，最初の写真シリーズ《触物紀》（1981 年）[2] の静物的写真をのぞき一貫して風景写真を撮影してきた。学生時代荒木経惟に魅了されたという露口が「なぜ風景写真にすすんだのか」という執筆者の問いに対して，露口は，あくまで背景としてではあるが 1960–1970 年代の風景写真（映画），風景論の隆盛を挙げた[3]。とりわけ連続殺人犯・永山則夫の足跡を映像で辿った映画『略称・連続射殺魔』（1969/1975 年）を発端とした「風景」論は，映像制作に携わる露口にもインパクトを与えたという。本稿で 1960–70 年代日本の「風景」論を精査する余力はないが，『略称・連続射殺魔』制作者のひとり松田政男の『風景の死滅』（初版 1971 年）[4] の「風景」観は，露口が他に参照することになるアメリカの《New Topographics》展（1975 年）の「風景」と共通する指摘 / 示唆も少なくない。『略称・連続射殺魔』の制作にあたって，「網走から札幌・函館・津軽平野・東京・名古屋・京都・大阪・神戸にいたる日本の東半分，さらには香港と，くまなく歩きまわ」り，「各地の風景のみを撮りまくった」松田らが見出したのは「均質化した風景」であった（引用は松田『風景の死滅』2013 年）。彼らが見出したのは，高度経済成長期に日本のすみずみまで浸透していった都市化・産業化であり，もはや「山」も帰るべき「故郷」もないというある種の閉塞感であった。他方，日本的経済成長と結びつけることはできないにせよ，

アメリカの《New Topographics》の写真群が提示したのも，人間の産業社会，大量生産・大量消費社会の進出・拡大によってもたらされた「手つかずの自然」の喪失状況であった。そこで切り取られた光景はかつての「自然」ではなく「人間によって変容させられた」[5]光景であり，人間の産業構造と自然との複合体であった。松田政男の「風景」論の政治的側面を度外視した表現となるが，もはや人間の外部に措定される「自然」は存在しない ──「人間」をどう捉えるかに差異はあるにせよ，こうした「風景」観が 1970 年代に支配的だったということはいえるだろう。

こうして 1960–1970 年代の「風景」観に触れたことは[6]，露口が後に風景というモティーフを選んだことだけでなく，その「風景」観にも間接的にせよ影響したといえるだろう。というのも，《on_sar》に見られるように，露口の写真行為には，カメラによる情景の「無私」の切り取りによって情景に潜在する暴力性を暴こうとする傾向があるからだ。情景，風景を撮ることは，それを意味的に「転覆」させることでもある。現在の社会，政治体制によって失われた人や自然の営みを想起させる露口の試みは，極めて 1960–70 年代的，社会批判的，政治批判的ともいえる。露口の風景写真の特質をひとまずこのように仮定したうえで，以下，露口の多くの写真プロジェクトから《苫東工業地帯》，《石狩新港》《地名》，《自然史》を取り上げたい。

1．露口の写真シリーズより

商業写真家として活動していた露口が，自己表現としての写真を撮影しはじめたのは，1981 年の《触物紀》（註 2）シリーズからである[7]。札幌市内外で撮影された同写真群の被写体には，川辺の光景もあるが博物館のはく製のような「静物」も含まれる。「物に触れる」というタイトルだが，しばしば被写体の輪郭はぼかされ，対象それ自体の輪郭や表面が強調されているともいいがたい。露口の関心が物とその周辺との「触」の面に向かっていたためか，あるいは 1960 年代の中平らの「ブレ」の様式的影響なのだろうか。

《触物紀》はモノクロの写真シリーズだが，1980 年代末から 1990 年代，露

口はカラー写真の撮影を開始する。カラーで都市の日常風景をスナップショット的に撮影する当時のスタイルはアメリカの「ニューカラー・フォトグラフィ」[8]に想を得たもので，触感のある色味や，都市のトリヴィアルな光景を捉えたその被写体が，その後の露口の写真群と比較して表現的に見える。「ニューカラー・フォトグラフィ」の代表的写真家であるウィリアム・エグルストンは当時露口が私淑した写真家だが，独特の色調で知られるエグルストンの写真はしばしば風景の「歴史」を効果的に捉えることも指摘されてきた。たとえば，見渡す限りの大平原を一列の貨物列車がすすむ光景を撮った『ミシシッピ州マークス』（1971 年頃）は，20 世紀における鉄道の衰退を効果的に視覚化した作例ともみなされる。自身ミシシッピ州に生まれたエグルストンは合衆国南部の光景，人や物の表情を，ときに主情的に，微細にうつし取る中で同地の社会や人の「歴史」を示唆する[9]。エグルストン写真への関心は，露口が風景写真にある土地の過去を物語る機能を求めていたことを予示しているようにも思われる。

1-1.《石狩新港》《苫東工業地帯》

土地開発による「風景」の均質化を意図としては批判的に，スタイルとしては無脚色でうつし取るという 1970 年代「風景」の露口への間接的影響は，露口が 1990 年代に撮影した《石狩新港》《苫東工業地帯》シリーズに顕著となる。もっとも，露口自身これらのシリーズがアメリカの《New Topographics》の写真群，とりわけ《カリフォルニア州アーバイン近郊の新工業団地》（初版 1974 年）を撮影したルイス・バルツの写真を念頭に撮影されたと語っており[10]，直接の発想源は《New Topographics》に求められよう。

ルイス・バルツが，自身の出身地にほど近いアーバインが，整備を経て企業誘致をすすめ工業団地化した光景を，建物のミニマルな形態を強調しつつ撮影したように[11]，露口が撮影したのも，北海道開発の一環として企業を誘致すべく整備された土地であった。バルツが撮影したように[12]，アメリカ，カリフォルニア州のアーバインでは農地のあった広大な土地にインフラが整備され，都市が生みだされた。いずれも 1970 年代の「北海道総合開発計画」

に端を発するという「石狩（湾）新港」および「苫東工業地域（苫小牧東部地域）」も，開発のために設立された企業が主導し，広大な土地を区画，整備し，企業誘致を図ってきた。つまり，土地開発という主題はバルツと露口に共通する。とはいえ，被写体は大きく異なる。バルツの場合，整備途中の荒地も少なからず撮影しているが，少なくとも《カリフォルニア州アーバイン近郊の新工業団地》の多くを占めるのは，新築の建造物の外観である。露口の場合，自身バルツとは違った仕方で工業団地を撮ろうとしたと語っているように，《石狩新港》《苫東工業地帯》の両シリーズに新築の建物はほぼ登場しない。露口の撮影したのは，同地域を流れる川，造成されたまま放置された空き地の端，ゴミのうち捨てられた道等々，およそ工業団地らしからぬ光景であり，被写体の点では，既出のエグルストンのゴミを撮影した写真群の方が近しいともいえる。石狩や苫東でアーバインのようには企業誘致が進まなかったという現実があるためか，1970 年代と 1990 年代という年代の違いがあるからなのか，露口の写真が示しているのはむしろ土地開発の過去性であるように見える。かつて人はこの土地を開発しようとしたが，その計画は頓挫，あるいは風化し，手を加えられた土地には新たな植物が育っている…〔図 2〕。1970 年代の《New Topographics》が「人間の変えた」光景をうつし取ったのに対して，露口の写真が示唆するのは，人間の痕跡を残しつつも「変えられた」自然がなお存続していく姿であり，「人間以後」という言葉を想起せざるを得ない状態といえる。



図 2　露口啓二《苫東工業地帯》より
1990 年代　カラー写真

1–2.《地名》[13]

1998 年から 2 年にわたり露口は北海道新聞夕刊に月に 1 度「地名の記憶」



図３　露口啓二「発足/Hattari/kamuy-hattar（神の・淵＝God's depth）2001 2001」カラー写真

と題した連載に写真を寄せた。北海道の地図と，アイヌ語に由来する地名を持つまちの地理や歴史をたどった見出しと本文（梁井朗・文），そして露口の写真で構成される同記事が，露口の写真シリーズ『地名』（1999 年開始）へとつながっていく。

《地名》は，露口がアイヌ語由来の地名を持つ場所を訪れ，現地に三脚を立てて光景を撮影した後，数カ月から数年の時間をおいて再び同地を訪れ，はじめの写真と連続する光景を撮った一連の写真群で，一度目と二度目の写真を並置する「二幅対」の形態を取る。〔図３〕── 小高い丘の上に立つ神社と丘の横を流れる小川，道路とその下を流れる川等（道路，川，神社は露口写真によく見られる被写体である），露口のうつし取った風景はいずれも植物や川といった自然要素に何らかの人間の関与が認められる自然と人工の合成風景だが，人影はない。

《地名》シリーズでは，各写真のタイトル，キャプションが重要な意味を持つ。タイトルには，現在用いられている漢字表記の地名とアルファベットで表記されたその読み方，やはりアルファベットで表記されたアイヌ語の発音とその推定されている意味が並記され，２枚の写真の撮影年月がつづく。挿図３の「発足/Hattari/kamuy-hattar（神の・淵＝ God's depth）2001　2001」のように，漢字表記→読み方→アイヌ語表記→研究によって想定されているもとのアイヌ語の意味が記載されるのである。同シリーズは，撮影の場がア

イヌ語由来の地名を持つ場であるという点で既に，特定の風景のはらみ持つ歴史や暴力に対する批判を含んでいる。同時に，タイトル／キャプションによって現在の日本語の地名ともとのアイヌ語の連続と断絶が示されることで，写真によって提示される現地風景は異なった趣を帯びる。かつてその場に暮らしていた，関わっていた人々の姿が現在の光景と対比的あるいは連続的に想起される ── あるいは現在の光景の中にかつての痕跡が認められようとする。現在の風景に異なった時制が加えられるともいえるだろう。

露口は，主としてアイヌ語地名研究者の山田秀三，言語学者・知里真志保の研究を参照しつつ北海道の各地をまわった。彼らが語った，現在の地名のもととなったアイヌ語の意味を確定することの困難さに露口はしばしば言及する[14]。破壊され，失われた，意味を生み出した音素のつながりを，研究者たちは探査によって「復元」し，意味を想起する。露口は《地名》で，意図的にファインダー越しに自ら構図を決めるという手続きを放棄する。風景と対峙することでそこに潜む均質化の「暴力性」を暴こうとする 1960–1970 年代風景論の背景もあるかもしれないが，《地名》においては，異なった倫理的要請もあったものと想像される。露口がしばしばアメリカ写真に言及するのは[15]，アメリカと北海道がいずれも植民によってつくりかえられていった土地だからであり，《地名》のプロジェクトにはアメリカにおける土地への名付けと北海道を比較するという意図もあった。露口自身は北海道出身ではない（入植者の家系でもない）が，後から来た者のまなざしで土地を「見定める」ことはためらわれたことだろう。北海道の風景の多くは喪失から成り立っているがゆえに，その風景は元来視覚的に明示され得ない次元を想起させる必要がある。もっとも，私たちの見ている光景にもかつての残滓はあるだろう。露口は風景を一つの視点に包摂されない断片的なものとして，想起のために提示したということもできよう。

風景写真にタイトル，キャプションのかたちで地名を並置するというアイディアは，高梨豊の写真（『地名論』）[16] から得たと露口はいう。とはいえ，少なくとも執筆者の見る限り，高梨の『地名論』に収められた都市の光景は懐かしさもあるが類似的でもあり ── もちろん見たことのある場所を再発見

し，その場の別の記憶が喚起されるということもあるのだが ──，場を特定するはずの地名がしばしばその場所の不特定性を強調する方向にも働く。露口の《地名》は，北海道の何気ない光景をうつし取りつつ，既述のように地名の並置によってその土地の「変貌」へ，「変貌」前の過去へと観る者の想像力をひき伸ばす。キャプションにおける断片的表記は，われわれに明瞭な過去のイメージを提示はしない。それでもわれわれはその土地で何があったのかに思いを馳せるだろう。《地名》における「地名」は，空間的均質化よりはむしろ，その土地の過去という空間的に制限された時間のベクトルへわれわれをいざなうのである。

1-3.《自然史》[17]

本稿で言及してきた，開発地域を撮影した《石狩新港》,《苫東工業地帯》,地名研究や地図上の記録にもとづいた《地名》《on_sar》は，いずれも露口の住む北海道に取材した写真群だったが，露口は自身の写真を撮りはじめた1980 年代から被写体を北海道に限定していないことは付言しておきたい。2010 年開始の《自然史》シリーズで，露口は自身の故郷・徳島を流れる吉野川流域を撮影場の一つに選び，古代豪族の忌部氏の名を冠した忌部山や，忌部氏が粟栽培の場とした吉野川の中州の粟島等を撮影している。人の行き来を想起させる山中の細道や山中に拓かれた土地の一部を撮った忌部山の写真では，自然の中にわずかに残された人の痕跡が強調され，粟島の写真ではなぎ倒された草木や，荒れ地に新たに繁茂する雑草が，吉野川の荒々しさを伝える。

当時札幌在住だった露口は,《自然史》シリーズを北海道の空知炭鉱の撮影から開始した。北海道および日本の近代史と切り離すことのできない北海道の炭鉱産業跡は，さまざまに記録・表現されてきたが，露口の捉えたのは植物に覆われたかつてのズリ山と水たまり,塞がれた坑道の上に伸長する植物,石炭の破片の散乱する樹林等，産業の痕跡が自然によって浸食されていく光景であった〔図 4 〕。露口はやはり自然の浸食の中に埋没しつつある人の営みの痕跡を求めて，アイヌの人々の生活，交易の場であった漁川流域，沙流

川流域へと撮影場所を拡げていく。アイヌの人々の生活と交易の場であった漁川流域の写真で，露口が自らしばしば取り上げるのは「シラッチセ」と呼ばれる，アイヌの人々によって熊送りの祭壇の設けられた場を部分的に撮影した写真である。〔図５〕同地に残された物品は，その場をアイヌの人々のみならず和人も使用していたことを物語る。ただし，一連の漁川流域写真でこの作例はやや例外的で，多くの写真で目に付くのは流され，滞留する岩石や木々，河岸工事の様子等，漁川の水流とそこへの人の介入の光景である。一方，沙流川流域の写真群でフレーミングされるのは，広域にわたる湿地の光景である。遠方に二風谷ダムを望むいくつかの「二風谷」写真で，露口は，動きのない水面を執拗に撮影するが，水面は繁茂する植物で覆われる。



図４　露口啓二「夕張炭鉱 2014」カラー写真



図５　露口啓二「本流シラッチセ 2012」カラー写真

《自然史》シリーズのもう一つの軸は，福島の写真群である。露口が《自然史》の撮影に取り組んでいた 2011 年，東日本大震災と福島第一原発事故が勃発する。センセーショナルな報道写真ではなく，既述のように人の営みが自然の浸食を受ける過程に関心を寄せる露口は，３年後の 2014 年に福島入りし，その後ほぼ１年置きに現地に入って，津波の跡地や人の住まなくなった帰宅困難地域の家屋等を撮りつづけた。露口による福島の写真は，津波被害



図 6　露口啓二「福島原子力発電所事故被災地帰還困難区域　N37°32′21″ E140°46′31″_2014」，カラー写真

跡地を撮ったものと原発事故によって帰宅困難となった区域や境界，および避難指示解除準備区域にひとまず区分できるだろう〔図 6〕。津波被害の跡の生々しい光景もあるが，帰宅困難区域や解除準備区域の光景は，ときに，説明されなければ他の理由で人の住まなくなった地方の住宅や山林風景と変わりないようにも見える。

《触物紀》から《石狩新港》，《苫東工業地帯》といった初期写真から，露口が一貫して撮りつづけてきたモティーフの一つに，水が挙げられる。《石狩新港》や《苫東工業地帯》では，タイトルが示すように人間の産業社会の帰結が主題であり，だからこそゴミや人間の拓いた道のように人の介入の分かる風景写真と比較して，蛇行する川の流れの写真は観る者を一瞬戸惑わせる。しかし《ミズノチズ》と《on_sar》，《地名》を経て，《自然史》では，さまざまなレベルでの人間の営み ──《自然史》においては古代豪族やその支配，アイヌの交易，近代における地下資源の採掘，現代の原発事故等 ── とあるときは共存し，あるときは略奪され，大きく変容を被りながらなお生き延びていく「自然」を，水，川が象徴的に表してきたようにも見える。《自然史》では人間による自然の略奪に対する批判的視点というよりもむしろ，人間の介入によって変容させられながら存続する自然のレジリエンスが描写される。川は，さまざまに変形されながらも，流れ，流すことをやめない。《New Topographics》を代表する写真家のロバート・アダムズは，その『新しき西部 /The New West』（1974 年初版）の序文で，人間活動と切り離された「自然」の観念と結びついた「風景」観に対して，次のように同概念を再定義した。ポスト《New Topographics》の写真家である露口の写真群は，アダムズ

のように「美」をうたうことはないにせよ，「正しく」この新しい風景写真の伝統に位置づけられ，また拡張していくものといえるだろう。

…われわれは風景を…自然と人によって生み出されたものとの全体の中で見なければならない。…あらゆる土地が，そこで起こったことと同等であり，自身の優美さ，自身のあらゆるものを越えて持続する美を，備えているのである。[18]

2．ロバート・スミッソンの写真（映像）観

1975 年に開催された《New Topographics》展に唯一アメリカ以外から参加したベッヒャー夫妻は，展覧会に先立つ 1968 年，芸術家ロバート・スミッソンとドイツで会い，同じ場所をたどった。《New Topographics》展誕生の経緯を多角的に検証したブリット・サルヴェセンは，このエピソードを口火としてスミッソンの《New Topographics》への影響を指摘しようとする[19]。サルヴェセンはスミッソンの有名なエッセイ「ニュージャージー州パセイックのモニュメントを辿る」[20]（1967 年）を参照しつつ，スミッソンの「消耗した風景 /degraded landscape」への関心を挙げる。「溜まった水…郊外スラム，無計画な都市の拡がり，際限なく建てられる団地…」として，スミッソンの叙述する光景の無機化，均質化をサルヴェセンは写真と結びつける。こうした光景の本質をスミッソンは写真によって把握されると考えた…そうサルヴェセンは説く。

スミッソンの《New Topographics》への影響関係は，サルヴェセンの記述では直接的にはベッヒャー夫妻とのそれに留まっているが，サルヴェセンがスミッソンを同展の写真群と結び付けようとした意図は理解できる。かつて「聖地」とも見なされた土地に無際限かつ無計画に拡がっていく住宅を撮影した既出のロバート・アダムズの写真以上に，建造された建物の類似性を執拗に追求し，ひいては世界の均質性，同質性 ── 何もかもが同じようにつくられ，分解してその本来的同質性へと還流していくだろうという予兆 ── を

提示したルイス・バルツの写真は，スミッソンの世界観とかなり近似している。

露口啓二の写真を論じる本稿でスミッソンに言及するのは，露口自身執筆者にスミッソンへの関心を語ったからでもあるが，スミッソンの「自然」観 ── スミッソンがこの語を積極的に採用することはなかったが ── が，露口写真のうつし出す「自然」の説明に有効だと考えるからである。かつてヴァルター・ベンヤミンは写真や映画と危機の時代の到来を結びつけたが，それを土，土地と概念的に結びつけたのがスミッソンであり，露口はまさにそれを実践してきたともいえるからである。

サルヴェセンが注目した 1967 年のエッセイ「ニュージャージー州パセイックのモニュメントを周る」（以下，「パセイックのモニュメント」「PM」と略す）は，スミッソンによる故郷パセイックへの帰省記だが，彼自身語る「地質学と鉱物学」（1966, “The crystal land”，以下「CL」と略す）[21] への関心と無関係とはいえない。スミッソンは芸術家仲間のドナルド・ジャッドとともに行った「岩石採り」でニュージャージー州の岩石の豊富さをその種類を挙げて説明しており（注 21）同州の地質についての知識は 1967 年以降のインスタレーション作品シリーズ「ノン・サイト」で発揮されるが，パセイックはそのニュージャージー州の一部である。もっとも，「パセイックのモニュメント」における「建設中の新しい高速道路の路肩を支えたコンクリート製迫持台」や「かつてパセイックの中央を走っていた古い鉄道の跡の上につくられた駐車場」といった叙述が強調するのは同市のモータリゼーションである。スミッソンは自ら「モニュメント」と呼ぶ市のさまざまな建造物に均一性，同一性を看取する。「あの平板なモニュメント（＝駐車場）には『面白い』ものなどなく，異質なものすらもなかった。それはただ無限というある種の使いまわしの観念を繰り返すだけなのだ」（PM）。こうした際限のない反復と繰り返しの中で，世界は均質化・同質化に向かっていく。

スミッソンの思考では，こうした事態は岩石・鉱物の分解になぞらえられる。そもそも一つの物体が別の物体の反映であり繰り返しである ── スミッソンは「鏡」を用語としても作品においても多用する ── という「パセイッ

クのモニュメント」においても色濃く打ち出されるスミッソンの世界観は，規則的な鉱物の結晶化過程と親縁性を持つ。加えて，岩石・鉱石の「破砕，腐食，分解，崩落，岩石の転がりや破片の移動，泥の流動，滑落」（1966, CL）に関心を寄せるスミッソンにとって，岩石や鉱石は結晶化の過程と同時に分解，崩壊，均一化の「運命」を内包する存在でもあった。「パセイックのモニュメント」の終わりに，スミッソンは次のように書く。

最後のモニュメントは砂場，あるいは砂漠のモデルだった。午後のパセイックの死んだ光のもと，その砂漠は無限の分解と忘却の地図と化していた。瞬間的小片のこうしたモニュメントが，絶望の光を投げかける太陽のもとできらめき，大陸全体の陰鬱な解体，海洋の消滅を示唆していた ── そこには緑の森も高い山々もなかった ── 存在するのは何百万もの砂粒であり，粒子化して粉塵となる骨や石のおびただしい堆積だけだった。砂の一粒一粒が無時間性ともいえる死んだメタファーであり，そのようなメタファーを解読しようとすれば，永遠の偽りの鏡を通すことになるだろう。（PM）

ここで，場の均質化・同質化，消耗は写真によってこそ捉えられるというサルヴェセンの議論に立ち返ろう。「パセイックのモニュメント」において，スミッソンはたしかに Instamatic でさまざまな建造物を撮影しつつ，次のようにも書く。「橋を渡ったとき，私はまるで木と鉄鋼でできたおびただしい数の写真の上を歩いているかのようだった…」。既に触れたように，同文でスミッソンは「鏡」の語をも多用する。これはスミッソン的世界観の核ともいえる物体の反映性，反復性のメタファーとみなし得る。すべては灰塵に帰すと考えるスミッソンにとって，物体の空間的個別性・固体性は一過性の姿に過ぎない。あらゆる存在物は別のものの反映であり，反映は個物の同質性，均質性を露わにする。「どの都市も，次なる都市を反映によって存在せしめるような三次元の鏡ではないだろうか…」（PM）。こうして，反映，鏡面に世界の本質を認めるスミッソンにとって，対象のうつしである写真，より正確にいえば映像は他で代替しがたいメディウムであった ── サルヴェセンの指

摘を改めて解説するならば，このように言えるだろうか。

こうして無際限に同じものを「反射」「反映」によって生み出していく鏡の法則 ── 既述のように，これをスミッソンの好んだ岩石や鉱石の「結晶」構造と結びつけることは十分に可能である ── は，同じもので溢れかえる均質性の蔓延という事態をあらかじめ内包している。鏡は，既存の物体をうつし出し（過去の現在化），これからもまた同じような物体が生まれていくことを示唆する（未来の内包）。際限ない反復性，反映性ゆえにスミッソンは「無時間性」「時間・結晶」の語を使用したが，これは時間の欠如というよりはかたちとして新奇なものが生みだされることはないという，むしろ空間上の無為を強調していると解せるのではないか。分解された岩石や鉱石の堆積である土は，過去にあった空間的実体の帰結であるとともに未来に生み出されるべき空間的実体を内包する凝縮体であるという点で時間的存在であり，写真はその「構造」を露呈させる媒体なのである。

本稿第一節で取り上げた，露口の写真シリーズに立ち返ろう。《石狩新港》，《苫東工業地帯》，《ミズノチズ》，《on_sar》…とシリーズ単位で見たとき，露口の写真は特定の地域への人の介入の顛末を辿っているように見える。《地名》に顕著なように，露口の風景は，現在を提示しながら，同時に現在では失われてしまった，明瞭に想像するのが難しい過去へとわれわれをいざなう。いわば見えているフレームの外へと観者を連れ出すのである。他方，露口の写真に最初期の頃から登場する水流や植物のモティーフは，土地の特定性を無化する方向にはたらく。もちろん，それぞれの川にはそれぞれの名があり，それぞれの歴史がある。東京の建物にまきつく植物は，植物の分布や地理的条件等から，北海道の炭鉱跡地の建物に繁茂する植物とはちがうだろう。しかし，《自然史》において明らかになるのは，複数の川とその流域が提示されることで，それぞれの川が特定化とは異なった次元で捉えられるようになるということである。吉野川，漁川，沙流川はそれぞれに異なった来歴を持ちながら，人の営みとともにありつづけてきた。そして，ダム建設によって流域の水没を余儀なくされた沙流川のように，従来の川と人とのかかわりに取

り返しのつかない損害がもたらされた上でなお水は動き，植物は繁茂していく。《自然史》というタイトルが示すように，自然なき人間はなく，人間なき自然もあり得ないという「人新世」的世間観に共鳴する露口の写真は，空知や福島に特化せず，地上のさまざまな場所で起きてきた，起きようとする事態をうつし取ろうとしている。露口の写真は過去の想起であるとともに未来の予兆であり，その未来はスミッソンほど徹底的ではないにせよ，同質性を帯びている。写真とは空間的，時間的に限定された対象の記録ではない。それはスミッソンにあっては目に見えない結晶構造それ自体を視覚化するメディウムであり，露口にあってはものごとの流れを個別性を超えて抽象的に露呈させるメディウムといえるかもしれない。

3．おわりに

北海道の風景写真は巷間に溢れているが，大きくは近代以降「つくり変えられ」てきた北海道の光景を撮るのは，本来はかなり難しい試みであるに違いない。現在の光景を無批判に撮影すれば，うつされた土地の来歴を隠蔽することにもなってしまうからだ。《石狩新港》《苫東工業地帯》から《地名》を経て，《自然史》に至ってなお，露口の北海道写真は現在の光景を生み出した過去の出来事へと観る者をいざない，光景を「自然」として，自分たちの所業から切り離された逃避的なものとして見ることを許さない倫理的次元を含んでいる。

本稿では露口の北海道写真に焦点をあててきたが，露口の被写体は必ずしも北海道には限らない。自身の故郷，東京，東北各地等，露口は各地を訪れて光景を撮影しており，近年の露口は土地をつくり変えてきた人間の営みをより広い射程で，より抽象的な次元で捉えようとしているように見える。《自然史》はまさにそうした露口の方向性が露わになったプロジェクトといえるだろう。人間がかかわり，とりわけ近代以降大きくつくり替えてきた土地，あるいは環境の「歴史」を，過去を示唆しつつ未来を含むものとして提示する，それが《自然史》に示された露口写真の特質といえるのではないか。露

口が同シリーズに「自然史」のタイトルを採用したのは，人間と切り離された「自然」の姿をうつし取るためではもちろんなく，人の営みと分かちがたく結びつきながらもなお人の世界に包摂され得ない側面を持つ世界を観者にかいま見せるためではなかっただろうか。本稿では，1960 年代から 1970 年代に活躍し，1970 年代の《New Topographics》に集約されていく新たな風景観を用意したロバート・スミッソンの議論を参照して，写真，映像が「風景」にとって何であり得るのかをも考察した。質量を持つ物体ではなくそれらを反復，増殖させる鏡の反映，反射作用にこそことの本質があるとみなしていたスミッソンにとって，写真とは飽和に向かう世界の法則の体現であり，それゆえにそこには過去も未来もが含まれている。近年さらに，人間とそれ以外のものとが生みだす「風景」の同質性を示唆しているように見える露口の写真もまた，写真は時間的・空間的に限定された眼前の光景の記録という次元を越えて，総体として世界の顛末を内包しているように見えてならない。

---

[1] 「アフンルパル通信　ex.1」2008 年 8 月 11 日発行，書肆吉成編集・発行。

[2] 《触物紀》の写真群は，露口の最初の個展（《触物紀》駅裏 8 号倉庫，札幌，1981 年）のために撮影された。商業写真家として働いていた露口にとって最初の作品としての写真群で，ブローニーサイズのフィルムで 50 本ほど撮影された。モノクロで，撮影場所は北大植物園や円山動物園等，札幌内外。植物園内の植物など「静物」写真というべき写真も多い。水の流れ等，以後の露口写真に頻出するモティーフが登場する。

[3] トークイヴェント《場と写真 ── 露口啓二に訊く》（2019 年 2 月 21 日，北海道大学人文・社会科学総合研究棟 408）に先立ってのインタヴューより。

[4] 松田政男『風景の死滅』（田畑書店 / 初版 1971 年，航思社 / 増補新版 2013 年）。

[5] 1975 年にアメリカ，ロチェスターのジョージ・イーストマンハウスで行われた伝説的展覧会《New Topographics》の副題は“Photographs of a Man-altered Landscape”「人間の変えた風景の写真」であった。展覧会名：《New Topographics: Photographs of a Man-altered Landscape》，会期：1975 年 10 月から 1976 年 2 月，会場：ニューヨーク州ロチェスター，ジョージ・イーストマン・ハウス（他巡回）。

[6] 露口自身は影響を否定するが，《触物紀》のタイトルは，松田政男とともに 1960–1970 年代「風景」論を展開した写真家・中平卓馬を髣髴とさせる。間接的にせよ，中平の「風景」観が露口に与えた影響はないとはいえないのではないか。

[7] 別途公開予定の 2019 年 2 月 21 日のトーク（註 3）記録にシリーズの経緯が語られている。

[8] Sally Eauclaire, *The new color photography*, Abbeville press publishers, New York, 1981.

[9] 1976 年にニューヨーク近代美術館で開催された《Photographs by William Eggleston》展

に合わせて刊行された写真集《William Eggleston's Guide》（1976/2002）には，ミシシッピ州各地の光景（農場，住宅地，室内風景，庭園）や老若男女がうつし出されており，展覧会企画者のジョン・シャーカウスキーはそこに身近な対象を撮った「家族のアルバム」，あるいは「日記」にも似た親密さを認めている。ベッドの上で銃を取り出して語る年配の男性の写真（「Morton, Mississippi」），大農場の端を歩く黒人女性（「Near Minter City and Glendora, Mississippi」）等の写真は，エグルストンが実在の人と光景を撮りながら同地の過去をもうつし取ろうとしていたことを示す例といえるかもしれない。

[10] 露口自身は，ルイス・バルツへの批判を込めてこれらの写真を撮影したと述懐している。

[11] Lewis Baltz, *The new Industrial Parks near Irvine, California,* Steidl: Goettingen, Germany, 1974/2001.

[12] バルツは《カリフォルニア州アーバイン近郊の新工業団地》（初版 1974 年）の刊行前に農場だったアーバインの様子を撮影している。例えば "The Prototype Works, 1967–76," in: *Lewis Baltz*, Fundación MAPFRE, Madrid/Steidl: Goettingen, Germany, 2017. 33, 35 頁に"Irvine Ranch"の写真が収載されている。

[13] 写真集は『地名 /Place Names』として赤々舎より 2018 年に刊行されている（倉石信乃寄稿）が，同写真集に収載されていない写真も多い。

[14]「…下にキャプションとして説明してある地名というのは，山田秀三さんの研究成果においてもいくつかの説があり，どれが正確であるかということは，あるいは正解があるのかさえもなかなか断定しづらい。そのなかで一番有力な説，もしくは，後から出てきますが，それが決定できない場合には二組の地名をキャプションとして添えてあります。…」カタログ《Blinks of Blots and Blanks/ICANOF 2009》ICANOF, 2009, 272 頁。

[15] アラン・トラクテンバーグ著『アメリカ写真を読む―歴史としてのイメージ』（生井英考・石井康史訳，白水社，1996 年（原著刊行は 1989 年）。同書第三章「風景を名づけて」に記載されているクラレンス・キングによるユタ州にある湖に 3 人の少女の名をつけたというエピソードに露口は衝撃を受けたようだ。

[16] 高梨豊『地名論 − Genius loci, Tokyo』毎日コミュニケーションズ，2000 年。

[17] 露口啓二『自然史』赤々舎，2017 年。

[18] 執筆者が参照したのは 2000 年に再刊されたドイツ語版である。Robert Adams, *The New West: Landschaften der Colorado Front Range,* Verlag der Buchhandlung Walther Koenig, Koeln, 2000 (1974). 引用は 16 頁。

[19] Britt Salvesen, "New Topographics", in: cat. *New Topographics,* the Center for Creative Photography, University Arizona/George Eastman House International Museum of Photography and Film, Rochester, New York/Steidl, Goettingen, Germany, 2009, pp.11–67.

[20] Robert Smithson, "A tour of the monuments of Passaic, New Jersey" (1967), in: *RS*, pp.68–74.

[21] Robert Smithson, "The crystal land" (1966), in: *RS*, pp.7–9.

RS: *Robert Smithson, the collected writings*, edited, with an Introduction by Jack Fram, University of California Press, Berkeley & Los Angeles, California, 1996.

北大文学研究院紀要 164 （2021）

ドイツ語から見たゲルマン語（5）
── 人称代名詞 ──

清　水　　誠

German as a Germanic Language (5)
— Personal Pronouns —
(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 164.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2021. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1-1. 英語とドイツ語の人称代名詞―概観[1]

名詞，形容詞，代名詞，数詞からなる名詞類の中で，人称代名詞ほど例外

[1] 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，ｱﾙ：ドイツ語アルザス方言，印欧：印欧祖語，英：英語，ｴﾙ：スウェーデン語エルヴダーレン方言，オ：オランダ語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古オ：古オランダ語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ノ：古ノルド語，ザ：（西）低地ドイツ語北低地ザクセン方言，ス：スウェーデン語，ﾁｭ：スイスドイツ語チューリヒ方言，デ：デンマーク語，ド：ドイツ語，西ﾌ：西フリジア語，ﾆｭ：ノルウェー語ニューノシュク，バ：上部ドイツ語バイエルン方言，ブ：ノルウェー語ブークモール，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，ﾌｪ：フェーロー語，メ：（東）低地ドイツ語メクレンブルク・フォーアポマーン方言，モ：北フリジア語モーリング方言

10.14943/bfhhs.164.l19

の多い品詞のカテゴリーはない。英語とドイツ語を比較してみよう[2]。

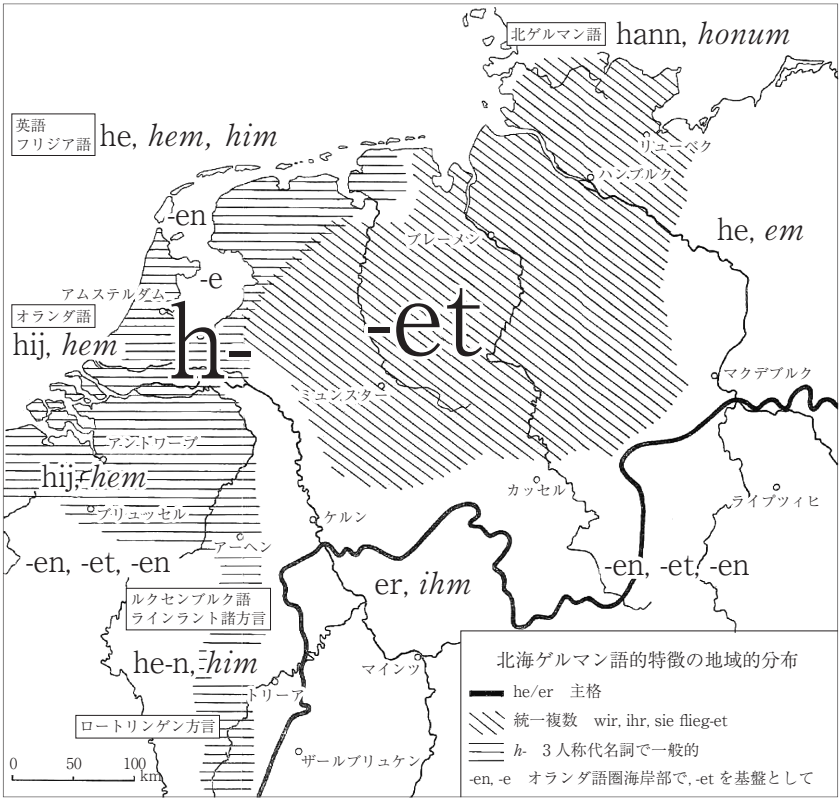
(1)	英 主格—目的格—所有代名詞	ド 主格—対格—与格—属格
1人称	単数 I — me — mine	ich — mich — mir — meiner
	複数 we — us — ours	wir — uns — uns — unser
2人称単・複数	you — you — yours	親称 単数 du — dich — dir — deiner
		複数 ihr — euch — euch — euer
		敬称 単・複数 Sie — Sie — Ihnen — Ihrer
3人称	単数 自然性	文法性
	男性 he — him — his	男性 er — ihn — ihm — seiner
	女性 she — her — hers	女性 sie — sie — ihr — ihrer
	物事 it — it — its	中性 es/'s — es/'s — ihm — seiner
	複数 they — them/('em) — theirs	sie — sie — ihnen — ihrer

この不規則性の背後には，歴史言語学的な理由が隠されている。まず，「英 me-***Ø***/we-***Ø***/you-***Ø***/he-***Ø*** ↔ ド mi***r***/wi***r***/ih***r***/e***r***」を比較しよう。「英 -Ø↔ド -r」は「北海ゲルマン語的特徴」（ド Ingwäonismen）の1例で，古英語が語末音 -r を失った結果である。ゴート語では（(6) 参照），mi***s***/wei***s***/ju***s***/i***s*** (-s＜ゲ *-z) のロータシズム（-r＜ゲ *-z /z/）を経ていない -s がドイツ語の -r に対応する。

英語の you は中英語の目的格に由来し，本来の主格は古めかしい ye「汝（なんじ）（ら）」である。-r を保つド ih***r***「君たち」（＜古高ド ir＜*jir（ihr の h は長音記号）＜ゲ *jūz）とは，同じ語源である。英 you は敬称「あなたがた」に用いた複数形の単数への拡大で，親称単数のド du「君」にあたるのは，英 thou「汝（なんじ）」である。大文字で書く敬称のド Sie「あなた（がた）」は，3人称複数 sie の転用で，遠回しに聞き手を示唆した表現である。ドイツ語の Sind ***Sie*** Japaner? 「あなたは日本人ですか」は，本来，英語の Are ***They*** a Japanese?

[2] ドイツ語では代名詞属格 meiner「私」と所有代名詞 mein「私の（もの）」は別形。

図 1　北海ゲルマン語的特徴の地域的分布



（Frings/Lerchner 1966: Karte 22 変更）

に対応する。

「英 he↔ド er」も本来は同じ語である。英 he は上記の「北海ゲルマン語的特徴」を反映して，ド er の -r が脱落し，残された母音 e が心細い「1 音性」（ド Einlautigkeit, Krahe/Meid 1969[7]b: 57）をカバーするべく，英 ***h***ere「ここ」/ド ***h***eute「今日」（＜古高ド ****h***iu tagu この日に）の指示詞標識 h-をまとった語形である。南部のチュ er/ベ är/バ ea に対して，北部では，オ ***h***ij/西フ ***h***y/ザ・メ ***h***e/ル ***h***ien のように分布している（**図表 1** 参照）。その中間に位置していた古高ドイツ語ラインフランケン方言（または西フランケン方言）が母

体の『ルートヴィヒの歌』（ド *Ludwigslied* 881/882）には，折衷形 her（古ザ hē）が見られる（Müffelmann 1970: 18, Braune/Reiffenstein 2004[15]: 243）。

(2) 古高ド Einan kuning uueiz ih, Heizsit ***her*** Hluduīg, / Ther gerno gode thionōt: Ih uueiz ***her*** imos lōnōt. ある王を（einan kuning）私は知っている（uueiz ih），彼は（***her***）フルドウィーグ（ルートヴィヒ Hluduīg）という名であり（heizsit），/ 熱心に（gerno）神に（gode）仕えている（ther〜thionōt）：神（＝彼 ***her***）は彼に（imo）それを（-s）報いることを（lōnōt）私は知っている（ih uueiz）

（Braune/Ebbinghaus 1979[16]: 136）

1-2. 1・2 人称代名詞―発話状況の人間代名詞

1-2-1. 双数に由来する複数

次に，1・2 人称に着目しよう。西ゲルマン語との対比で，北ゲルマン語からアイスランド語，古ノルド語，フェーロー語を挙げる[3]。フェーロー語では属格が衰退していているが，機能語である人称代名詞では残っている。

(3) ア/（古ノ）主格―対格―与格―属格　ﾌｪ 主格―対格―与格―属格

1 人称 単数 ég ― mig ― mér ― mín　　eg ― meg ― mær ― mín

（古ノ ek ― mik ― mér ― mín）

複数 við ― okkur ― okkur ― okkar　　vit ― okkum ― okkum ― okkara

［尊厳の複数 vér ― oss ― oss ― vor］

（古ノ 双数 vit ― ok(k)r ― ok(k)r ― okkar↔複数 vér ― oss ― oss ― vár）

2 人称 単数 þú ― þig ― þér ― þín　　tú ― teg ― tær ― tín

（古ノ þú ― þik ― þér ― þín）

［敬称 単(・複) þér ― yður ― yður ― yðar　単 tygum ― tygum ― tygum ― tygara］

---

[3] ﾌｪ eg[e:]/meg[mɛə]/teg[tʰɛə]/tygum['tʰi:jʊn] の g の文字は発音しない。

複数 þið ― ykkur ― ykkur ― ykkar　　tit ― tykkum ― tykkum ― tykkara
（古ノ 双数（þ)it ― yk(k)r ― yk(k)r ― ykkar↔複数（þ)ér ― yðr ― yðr ― yð(v)ar）

「英 we-***Ø***/you-***Ø***↔ド wi***r***/ih***r***」に対して，「ア vi***ð***/þi***ð***/ﾌｪ vi***t***/ti***t***（＜古ノ vi***t***/(þ)i***t***）」となっている[4]。「英 -Ø/ド -r」に「ア -ð（＜古ノ -t)/ﾌｪ -t」が対応するのは，なぜだろうか。古風なアイスランド語には，vé***r***/þé***r***（＜古ノ vé***r***/(þ)é***r***）「私たち/あなたがた」が残っている。þé***r***「あなた」は þú「君」に対する敬称だが，ほとんど使わない[5]。vér は王が「我々フリズリク」（ア vér Friðrik）などと自称した「尊厳の複数」（plural of majesty）で，いかめしい文章でも稀である（森田 1981: 77, Kress 1982: 104）。じつは，由緒正しい複数形は vé***r***/þé***r*** だった。両者の語末音 -r は，ド wi***r***/ih***r*** と共通で，ゴ wei***s***/ju***s***（＜ゲ *wejez, *weiz/ *jūz）の -s に対応する。ゴート語の -s（＞ア/ﾌｪ -r）は，北ゲルマン語と違ってロータシズムを経ておらず，英語の名詞複数形 -(e)s（＜ゲ *-(i/e)z＜印欧 *-es）の -s と同じ複数形語尾に由来する（Krahe/Meid 1969[7]b: 53）。ゴ dagō***s***/古英 daga***s***/古ノ daga***r***「日々」（単数 dags/dæġ/dagr）と比較されたい。

現代の北ゲルマン語では，２人称の敬称代名詞はほとんど用いず，親称代名詞に由来する１種類にほとんど統一されている。大陸北ゲルマン語と違って，動詞の人称・数の変化を統一語尾に簡素化していないアイスランド語とフェーロー語でも，同様である。その両言語では，使用が稀な２人称敬称代名詞単数形（ア þér/ﾌｪ tygum）が主語になると，補語の名詞・形容詞は単数形だが，定動詞は複数形になる。ドイツ語では「叙述用法」（attributive use）の形容詞は無変化だが，補語が名詞の場合にはやはり同様である。

（4）　ア Þér ***eruð kennari***. あなたは先生（単数 kennari）です（複数 eruð↔単数 ert）

---

[4] 「ア ***þ***ið/***þ***ér＜古ノ (þ)it/(þ)ér，ﾌｪ ***t***it＜古ノ (þ)it」の þ-/t-の付加は，「動詞 -t＋人称代名詞」の語順で動詞語尾 -t が人称代名詞の語頭に異分析されたことによる。

[5] ア þér は þið「君たち」に対して「あなたがた」の意味にもなる（Kress 1982: 104, Thomson 1987: 334）。ﾌｪ tygum「あなた」は単数のみ。

フェ Tygum ***eru*** {***vakur/vøkur***}. あなた（男性/女性）は美しい（複数 eru（↔単数 ert）＋男性単数 vakur/女性単数 vøkur）

ド Sie ***sind*** {***Lehrer/Lehrerin***}. あなた（男性/女性）は先生（男性/女性）です（複数 sind＋男性単数 Lehrer/女性単数 Lehrerin）

今では一般的な vi***ð***/þi***ð***「私たち/君たち」は，「双数」（dual）の転用だった。この世は 2 者のペアがつきもので，「1 つ，2 つ，たくさん」という数え方は，言語類型論的にも珍しくない。古ゲルマン諸語には，1・2 人称代名詞に双数形が残っていた（古高ドイツ語は属格 unkēr のみ例証）。ア vi***ð***/þi***ð***（＜古ノ vi***t***/(þ)i***t***）は，ゴ wi***t***/*ju***t***（主格は推定形＜ゲ *weta/*juta）に対応する。ア -ð（＜古ノ -t）/ゴ -t は数詞「2」に由来し（Seebold 1984: 25f.），we- two/you- two の構成である（Lehmann 1994: 27）。

ゴート語は，動詞の直説法能動態現在形で複数形（ゴ baíram/baíriþ 私たち/君たちは運ぶ ←baíran）と双数形（ゴ baírōs/baírats 私たち/君たち 2 人は運ぶ）を区別する。人称代名詞双数形は，北フリジア語モーリング方言の 1 / 2 人称 wat/jat とセルリング方言の 1 / 2 / 3 人称 wat/at/jat（＜ja 3 人称複数，Seebold 1984: 58, Howe 1996: 193），上部ドイツ語バイエルン方言の 2 人称 ees（Merkle 1990: 123）に残っている。しかし，バイエルン方言では 13 世紀から複数の意味を表し（ヴァインホルト他/井出訳 2017: 77, 79），北フリジア語では使用が稀（まれ）である。次はモーリング方言の例だが，実際はほとんど使わない。

(5) モ Min wüf än ik — ***wat*** hääwe fjouer bjarne. 妻（min wüf）と（än）私（ik）—私たち 2 人には（wat）4 人の子供が（fjouer bjarne）います（＝持っています（hääwe））（清水 1992: 100）

1-2-2. 対格と与格の識別と融合

次に，1・2 人称の対格と与格を検討しよう。単数については，「英 目的格 me-***Ø***↔ド 対格 mi***ch***/与格 mi***r***」を比べると，英語には「対格 -ch/与格 -r」

の目印がない。1-1 で述べたように，英 you は古くは複数目的格だった。以前の 2 人称単数主格は聖書などに登場する thou「汝（なんじ）」（ド du）で，やはり「英 目的格 thee-***Ø***↔ド 対格 di***ch***/与格 di***r***」の対立である。ゴート語も「対格 -k/与格 -s」（ゴ mi***k***/mi***s***←ik 私，þu***k***/þu***s***←þu 君）で，「ド 対格 -ch/与格 -r[6]」に対応する。(3) の北ゲルマン語も，ア mi***g***/mé***r***，ﾌｪ me***g***/mæ***r***（＜古ノ mi***k***/ mé***r***）「私」，ア þi***g***/þé***r***，ﾌｪ te***g***/tæ***r***（＜古ノ pi***k***/þé***r***）「君」となるので，「対格 -g（＜-k）/与格 -r」のマークがある。次にゴート語と古高ドイツ語の変化表を示す。

(6)	ゴ 主格―対格―与格―属格	古高ド 主格―対格―与格―属格
1 人称	単数 ik ― mik ― mis ― meina	ih ― mih ― mir ― mīn
	双数 wit ― ugkis ― ugkis ―*ugkara	Ø[7]― Ø ― Ø ― unkēr
	複数 weis ― uns, unsis ― uns, unsis ― unsara	wir ― unsih ― uns ― unsēr
2 人称	単数 þu ― þuk ― þus ― þeina	dǔ― dich ― dir ― dīn
	双数 *jut ― igqis ― igqis ― igqara	Ø ― Ø ― Ø ― Ø
	複数 jus ― izwis ― izwis ― izwara	ir ― iuwih ― iu ― iuwēr

「英 -Ø↔ド -r」は古英語が -r を失った「北海ゲルマン語的特徴」の反映である（1-1 参照）。ということは，英 me-***Ø***/thee-***Ø***「私/君」はド mi***r***/di***r*** の与格に対応し，与格が対格を吸収して目的格になったのだろうか。この問題は 1-2-3 で取り上げる。

北海ゲルマン語の後裔である西フリジア語（my-***Ø***/dy-***Ø***）と低地ドイツ語（ザ・メ mi-***Ø***/di-***Ø***），それに，北海沿岸で隣接するオランダ語（mij-***Ø***）も同様である。

---

[6] ド -ch[x, ç]＜-k は高地ドイツ語子音推移（第二次子音推移）による。ゴ -s はロータシズムを経たド/ア -r に対応する。

[7] 「Ø」は語形が例証されないことを示す。「*」は推定形である。

(7)　主格―目的格

		西フ	ザ	メ	オ
1 人称	単数	ik ― my	ik ― mi	ik ― mi	ik ― mij
	複数	wy ― ús	wi ― uns/uus	wi ― uns	wij ― ons
2 人称	単数	do ― dy(親称)	du ― di	du ― di	jij ― je(親称)[8]
	複数	jimme ― jimme	ji ― jo/ju/juuch	ji ― ju/juuch	jullie ― jullie(親称)

これに対して，大陸北ゲルマン語の 4 言語では，対格（ア mig/þig＜古ノ mik/ þik）が与格（ア mér/þér＜古ノ mér/þér）を吸収して目的格になった（デ mi***g***[mɑi̯]/ di***g***[d̥ɑi̯]，ス mi***g***[mɛj]/di***g***[dɛj]，ブ me***g***[mæi]/de***g***[dæi]，ﾆｭ me***g***[me:g]/ de***g***[de:g]）。その移行過程を示すのが，古風な形態をとどめるスウェーデン語エルヴダーレン方言である（Åkerberg 2012: 217）。主・対・与格を保つ同方言も，ig［i]「私」/du「君」の与格は対格と同形の mi***g***［miɣ］/di***g***［diɣ］である[9]。

(8)　主格―目的格(対/与格)

		デ	ス	ブ	ﾆｭ	ｴﾙ
1 人称単数		jeg ― mig	jag ― mig	jeg ― meg	eg ― meg	ig ― mig/mig
		[jɑi̯][mɑi̯]	[jɑ(:g)][mɛj]	[jæi][mæi]	[e:g][me:g]	[i][miɣ]
	複数	vi ― os	vi ― oss	vi ― oss	vi/me ― oss	wi̯ð ― uās(s)/uās(s)
2 人称単数		du ― dig	du ― dig	du ― deg	du ― deg	du ― dig/dig
		[d̥ɑi̯]	[dɛj]	[dæi]	[de:g]	[diɣ]
	複数	I ― jer	ni ― er	dere ― dere	de ― dykk	ið ― ið/ið

複数ではどうだろうか。単数で対格と与格を区別する他の現代語でも，複数では両者の融合が進んでおり，(1) のドイツ語は「対・与格 uns-***Ø*** 私たち/

[8] 古オ thu（英 thou/ド du）は英 you/ド ihr にあたるオ jij に代わっている。

[9] 2 人称敬称には，デ De ― Dem/ブ De ― Dem/ﾆｭ De ― Dykk「あなた（がた）」があるが，ほとんど使わないので，(7) では割愛している。

eu***ch*** 君たち」である。（6）の古高ドイツ語では，「対格 unsi***h*** ―与格 uns-***Ø*** 私たち」/「対格 iuwi***h*** ―与格 iu-***Ø*** 君たち」なので，1 人称複数対格 uns-***Ø*** は与格（-Ø），2 人称複数与格 eu***ch*** は対格（-ch）との類推とわかる。

一般に複数では，語形変化が平均化する「統一複数」（ド Einheitsplural）の傾向がある。しかし，（3）に示したアイスランド語では，すでに古ノルド語でも対格と与格が同形だった（対・与格 okku***r***（＜古ノ ok(k)***r***）私たち/yk-ku***r***（＜古ノ yk(k)***r***）君たち/yðu***r***（＜古ノ yð***r***）あなたがた）[10]。（6）に示したゴート語の「対・与格 unsi***s*** 私たち/izwi***s*** 君たち/ugki***s*** 私たち 2 人/igqi***s*** 君たち 2 人」も，与格（-s）への類推である。3 人称では単複ともに対格と与格を峻別（しゅんべつ）していた古ゲルマン諸語だが，1・2 人称では事情が異なり，両者の融合が散見される。

1-2-3. 北海ゲルマン語的短形と対格・与格の区別

かたや，北海ゲルマン語の仲間だった古英語と古ザクセン語には，当時から対格と与格の目印を欠く語形，つまり，「北海ゲルマン語的短形」（ド ingwäonische Kurzform, Seebold 1984: 35）があった。語形には類書の間で微妙に差があるが，大まかに示してみよう。

(9)		古英 主格―対格―与格―属格	古ザ 主格―対格―与格―属格
1 人称	単数	iċ ― mĕ, meċ ― mĕ― mīn	ik ― mĭ, mik ― mĭ― mīn
	双数	wit ― unc ― unc ― uncer	wit ― unk ― unk ― unkero
	複数	wĕ― ūs, ūsiċ ― ūs ― ūser, ūre	wĭ, we ― ūs, unsik ― ūs ― ūser
2 人称	単数	þŭ― þĕ, þeċ ― þĕ― þīn	thŭ― thĭ, thik ― thĭ― thīn
	双数	ġit ― inċ ― inċ ― inċer	ġit ― ink ― ink ― Ø
	複数	ġĕ― ēow, ēowiċ ― ēow ― ēower	ġĭ, ġe ― iu, eu ― iu, eu ― iuwar, euwar

[10] フェーロー語の「対・与格 tykk***um*** 君たち/tyg***um*** あなたがた」の -um[ʊn] は，3 人称複数与格語尾と同じである。双数に由来する tykk***um***/tykk***um*** も同様。

対格と与格が目的格に融合した現代語も，「英 us-***Ø***/you-***Ø***/ザ jo-***Ø***, ju-***Ø***/メ ju-***Ø*** あなたがた」となる[11]。これは，1-1 で述べた「北海ゲルマン語的特徴」として語末音 -r が脱落した結果と重なる。しかし，どうして 1・2 称代名詞に限って，古語の時代から，あちこちで対格と与格が混合していたのだろうか。1-3-1 で述べるように，3 人称代名詞では，対格と与格の区別がある言語の場合には，両者は基本的に別々の語形である。語末音 -r の脱落だとしても，対格に -k/-ċ /tʃ/の目印を欠く与格と同じ異形が併存していた事実は，奇妙である（古英 mē, meċ/古ザ mǐ, mik 私；古英 ūs, ūsiċ/古ザ ūs, unsik 私たち；古英 þē, þeċ/古ザ thǐ, thik 君）。

ドイツのゲルマン語学者ゼーボルト（Elmar Seebold）は，ゲルマン祖語には対格と与格に共通の*me/*mi といった「前接語」（enclitic）の語形があり，「対格 *miz（＜印欧 *me＋-s）」↔「与格 *mik（＜印欧 *me＋-ǵe）」は，格の区別を明示する場合の特別な非前接的語形だったと推定している。「北海ゲルマン語的特徴」として与格の -r（＜*-z）が失われると，対格の -k も余剰的になり，前接語の語形に融合したという（Seebold 1984: 35f.）。ただし，対格と与格の区別は，古い印欧語でもヒッタイト語の人称代名詞を除いて明確だった。この事情についての統一的な説明はない（Howe 1996: 105–118）。

1・2 人称代名詞の対格の目印は，-ch（＜-h）/-ċ/-g（＜-k）/-k である（ド mi***ch***/古英 me***ċ***/ア mi***g***（＜古ノ mi***k***）/ゴ mi***k*** 私；ド di***ch***/古英 þe***ċ***/ア þi***g***（＜古ノ þi***k***）/ゴ þu***k*** 君；古高ド unsi***h***/古英 ūsi***ċ***/古ザ unsi***k*** 私たち；ド eu***ch***/古高ド iuwi***h***/古英 ēowi***ċ*** 君たち，など）。これは，ラテン語の ego「私」にあたる 1 人称単数主格（ド i***ch***（＜古高ド i***h***）/古英 i***ċ***/ア é***g***（＜古ノ e***k***）/ゴ i***k***（＜ゲ *eka））の -ch（＜h）/-ċ/-g（＜-k）/-k（＜印欧 *-ǵe）の付加によると言われている（Fulk 2018: 182–188, Krahe/Meid 1969[7]b: 52–55）。発話状況の当事者である話し手と聞き手のマーカーだったのだろう。

じつは，これは再帰代名詞（ド sich/ア sig など）にも共通している。この

[11] 西フ jo-***Ø***「あなた」/オ je-***Ø***「あなた（がた）」も参照。高地ドイツ語子音推移（-ch＜-k）を経たザ・メ juu***ch***「あなたがた」は高地ドイツ語的な語形なので（Niebaum 1983: 163），除外する。Cyriacks/Nissen（1998: 89）も jo/ju だけを記載している。

問題については，本稿の続編で扱う。

1-3. 3人称代名詞―人間・物事を示す有性代名詞

1-3-1. 有性代名詞と無性代名詞

以上の事実を3人称代名詞と比べてみよう。まず，1・2人称代名詞と3人称代名詞の違いは何だろうか。意味的には，前者は人間のみ（ペットなどの動物や擬人化した対象を含む）を指し，後者は人間と物事の両方を指す。もう1つ重要なのは，前者は性を区別しない「無性代名詞」(non-gendered pronoun）で，発話状況に依存して指示対象が「直示的」(deictic）に決まる点である。一方，後者は性を区別する「有性代名詞」(gendered pronoun）である。つまり，話者と聞き手以外の森羅万象について，性を頼りに，文脈（コンテクスト）に依存する「照応」(anaphora）の機能を司(つかさど)る。一部では，3人称代名詞は直示的機能を持つ指示代名詞と重なるが（1-3-2参照），基本的にはこれと区別して「照応代名詞」(anaphoric pronoun）とも言う。ドイツ語のich, der ***ich*** dich liebe「君のことを愛しているぼく」/du, die ***du*** mich nicht liebst「ぼくのことを愛していない君」という関係文中のich/du「ほく/君」には，照応の役割があると言えるが，あくまで余剰的で周辺的な用法である。

語形変化の点でも，3人称は性の区別を反映しつつ，1・2人称の対格（ド -ch/ア -g）と与格（ド・ア -r）とは目印が異なる。また，複数でも対格と与格を識別する。ドイツ語とアイスランド語で比較してみよう。

(10)　1人称単数：対格　ド mich/ア mig↔与格　ド mir/ア mér
　　対格　ド dich/ア þig↔与格　ド dir/ア þér
　↔3人称単数：男・中性：対格　ド ihn/ア hann↔与格　ド ihm/honum
　　女性：対格　ド sie/ア hana↔与格　ド ihr/ア henni
　1・2人称複数(＜ア 双数)：対・与格　ド uns/ア okkum, ド euch/ア þykkum
　↔3人称複数：対格　ド sie/ア 男 þá/女 þær/中 þau
　　↔与格　ド ihnen/ア þeim

ただし，(3) に挙げたフェーロー語の 1 ・ 2 人称複数与格 okk***um***「私たち」/tykk***um***「君たち」，それに tyg***um***「あなた」の -um は，3 人称複数与格 teim***um***「彼（女）・それら」と共通である。しかし，アイスランド語の複数与格 þeim（英 them）に対して -um が余計なので，3 人称経由の類推による付加であることがわかる。

対格と与格が融合した現代語の目的格の語形的区別にも，3 人称では性が関与している。たとえば英語では，「人間：与格 him/her（whom）」↔「物事：対格 it（that, what）」のように，意味に応じて両者の由来が異なる。つとにデンマークの英語学者イェスペルセン（Otto Jespersen 1860–1943）は，人間を表す代名詞は名詞や形容詞よりも間接目的語に使う頻度が高いためであると断定としている（Jespersen 1894: 183）。今でも英語学の概説書などに引用されることがある説だが，母語であるデンマーク語の mig/dig（英 me/thee）が対格由来（ド mich/dich）である事実には，説明を控えている[12]。「私」も「あなた」も普通は人間なのだが。

大陸北ゲルマン語では，(8) で見たように，1 ・ 2 人称代名詞の目的語は対格由来である。一方，3 人称代名詞は，ニューノシュクの (12)「主格 dei（英 they）―目的格 dei」を除いて，上記の英語と似た分布になる。語末音が「男性 -m/女性 -e」ならば与格，「両性 -n/中性 -t」ならば対格由来である（(13) ア（古ノ）与格：男性 -m/女性 -i/(-e)）参照）。1 ・ 2 人称では与格が対格と同形のエルヴダーレン方言も，3 人称複数は与格 diem/dyöm に融合している[13]。スウェーデン語の (11)「主格 de[dɔm]（英 they）/dom ― dem[dɔm]（英 them）」では，目的格が主格にまで及んでいる。

---

[12] “The reason of this constant preferring of the dative forms in the person-indicating pronouns is no doubt the fact that these pronouns are used as indirect objects more often than either nouns or adjectives; at any rate, it is a phenomenon very frequently found in various languages; compare Danish *ham, hende, dem, hvem,* originally datives, now also accusatives and partly even nominatives（while it is true that in *mig* and *dig* the acc. has outlived the datives）...”（Jespersen 1894: 183）

[13] エルヴダーレン方言では語頭音 h–が代名詞に限らず脱落している（ɪʟ åvå /aus/og，ス ha(va)/hus/hög，英 have/house/high，ド haben/Haus/hoch）。

(11)	主格―目的格		デ	ス	ブ
3人称単数	人間	男性	han ― ham	han ― honom	han ― ham/han
		女性	hun ― hende	hon ― henne	hun ― henne
	物事	両性	den ― den	den ― den	den ― den
		中性	det ― det	det ― det	det ― det
	複数		de ― dem	de[dɔm] ― dem[dɔm] /dom /dom	de ― dem

(12)		ニュ 主格―目的格	ェル 主格―対格―与格
3人称単数	男性	han ― han/honom	an/n ― an/n ― onum/om
	女性	ho ― ho/henne	ǫ[ɔ̃]― ona/on ― enner/ener/en
	中性	det ― det	eð ― eð ― dyö
	複数	dei ― dei	dier ― diem/dyöm ― diem/dyöm

(13)		ア/(古ノ) 主格―対格―与格―属格	フェ
単数	男性	hann ― hann ― honum ― hans	hann ― hann ― honum ― hansara
	女性	hún ― hana ― henni[14] ― hennar	hon ― hana ― henni ― hennara
	中性	það(古ノ þat)― það(古ノ þat)― því ― þess	tað ― tað ― tí ― tess
複数	男性	þeir ― þá ― þeim ― þeirra/(古ノ þeir(r)a)	teir ― teir ― teimum ― teirra
	女性	þær ― þær ― þeim ― þeirra/(古ノ þeir(r)a)	tær ― tær ― teimum ― teirra
	中性	þau ― þau ― þeim ― þeirra/(古ノ þeir(r)a)	tey ― tey ― teimum ― teirra

1-3-2. 指示代名詞との関係―低地ドイツ語と北ゲルマン語

3人称代名詞は指示代名詞と語形変化が似ている（清水 2021b: 4f.）。指示代名詞も有性代名詞であるし，3人称代名詞にも照応以外に，発話場面の対象を指示する直示的機能がある。ド Kennst du ***ihn*** dort drüben?「君はあそこの彼を知っているかい」では，話題に出ていない「彼」をいきなり3人称代名詞 ihn で指し示すことができる。ただし，これは人間に限られ，物事「そ

[14] 古ノ henni/honum（Fulk 2018: 190）以外に henne/honom の表記もある。

れ」（ド den Wagen 車，など）を指すことはできない（Duden 2009[8]: 27）。また，指示代名詞は文脈（コンテクスト）内の要素を同定する文脈内指示（テキスト内指示）を通じて，人称代名詞の照応を補う。ド Hans sprach mit Paul und ***seiner/dessen*** Schwester.「ハンスはパウルと彼の（seiner/dessen ←der「その人」の属格）姉妹と話した」では，seiner はハンス，指示代名詞 dessen はパウルの解釈が普通である。

そこで，指示代名詞は 3 人称代名詞に侵入しやすいと言える。たとえばドイツ語では，物事を表す属格目的語には指示代名詞を用いる。次例の指示代名詞属格 dessen（←das それ）は，人称代名詞属格 seiner（←es それ）では不自然になる：ド Behalte dein Geld, ich bedarf ***dessen*** nicht.「君のお金は取っておけ。ぼくはそれが（dessen）必要ないから（bedürfen〈属格が〉必要だ）」（Dal/Eroms 2014[4]: 77）。

低地ドイツ語北低地ザクセン方言では，英 he/she/***it***/they ― ド er/sie/***es***/sie ― オ hij/zij/***het***/zij ― 西フ hy/hja～sy/***it***/hja～sy に対して，ザ he/se/***dat***/se となる（(14)）。本来の人称代名詞中性単数が指示代名詞 dat（英 that/ド das/オ・西フ dat）にお株を奪われているのである。本来の人称代名詞（英 it/ド es/オ het/西フ it）は弱形（ザ 't）として命脈を保っている。

(14) 英 ***It*** rains. / ***It*** is already five o'clock. ド ***Es*** regnet. / ***Es*** ist schon fünf Uhr.
オ ***Het*** regent. / ***Het*** is al vijf uur. 西フ ***It*** reint. / ***It*** is al fiif oere.
↔ザ ***Dat*** regent. / ***Dat*** is al fief Klock. 雨が降る/もう 5 時です

また，無強勢のド es[əs]/オ het[ət]/西フ it[ət]の目的格は，強勢が置かれる主文の文頭（前域）には使えず，指示代名詞ド das/オ・西フ dat に頼っている。

(15) ① ド {***Das/*Es***} wissen wir schon. / オ {***Dat/*Het***} weten we al.
西フ {***Dat/It***} witte wy al. それはもう私たちは知っています
② ド {***Das/*Es***} bin ich nicht. / オ {***Dat/*Het***} ben ik niet.
西フ {***Dat/*It***} bin ik net. それは私ではありません

大陸北ゲルマン語のデンマーク語，スウェーデン語，ブークモールでも，（11）のように，人間を表す 3 人称代名詞 han「彼」/hon, hun「彼女」に対して，物事を表す 3 人称代名詞の座は指示代名詞 den/det「それ」が占めている。複数では，（12）（13）に挙げた例を含めて，þ/d/t- で始まる指示代名詞に完全に乗っ取られている。これは，英語に借用された they-them-their(s) の「th-系列」にあたる。

ドイツ語でも，（16）に示すように，強勢を置く場合には人称代名詞は人間を中心とする有生名詞に限られ，物事には「d-系列」の指示代名詞を用いる傾向が見られる。大陸北ゲルマン語の 3 言語の分布は，これを推し進めた結果と言えるだろう。

（16） ド ① Dort stehen Anna und ***Otto***. ***Ihn*** kennst du wohl noch nicht. あそこにアナとオトー（Otto 男性・人間）がいる。彼のことは（ihn）君はたぶんまだ知らないだろう （Duden 2009[8]: 270）

↔Auf dem Tisch liegen eine Säge und ***ein Hammer***. ***ʔIhn*** brauchst du allerdings nicht. 机の上にのこぎりと金槌（Hammer 男性・物事）がある。ただ，それ（＝金槌 ihn）は君は必要ないね （ib. 270）

② Das ist ***meine andere Mitarbeiterin***. Auch ***sie*** kann Ihnen helfen. こちらが私のもう一人の女性の同僚（Mitarbeterin 女性・人間）です。彼女も（sie）またあなたに手助けしてくれるでしょう （ib. 270）

↔Er öffnete ***die letzte Kiste***. Auch ***ʔsie/diese*** war leer. 彼は最後の木箱（Kiste 女性・物事）を開けた。それ（sie/diese）もまた空だった （ib. 270）

ただし，語頭音 th/þ/d/t- つきの指示代名詞が侵入した語形に，つねに直示的意味があるとは限らない。英語の定冠詞 the（***the*** book↔***that*** book）は好例である。人称代名詞以外でも，「虚辞」（expletive）の英 there は無強勢

で特定の場所を指さず，場所の副詞 there「そこ」と棲み分けている。無強勢の虚辞としての西フ der[dər]/デ der[d̥ɛʀ] も同様であり，強勢を持つ場所の副詞，西フ dêr['dɛ:r]/デ der['d̥ɛ:ʔʀ] と使い分ける。一方，オランダ語の虚辞 er[ər] は無強勢で，指示詞標識 d-の侵入を免れ，強勢を持つ場所の副詞 daar['da:r]「そこ」とは明確に語形が異なる。

(17)　虚辞↔場所の副詞「そこ」

英　***There*** is a book on the table. ↔ The book is over ***there***.

西フ ***Der*** [dər] leit in boek op tafel. ↔ It boek leit ***dêr*** ['dɛ:r].

デ　***Der*** [d̥ɛʀ] ligger en bog på bordet. ↔ Bogen ligger ***der*** ['d̥ɛ:ʔʀ].

オ　***Er*** [ər] ligt een boek op tafel. ↔ Het boek ligt ***daar*** ['da:r].

1-3-3.「母音系列」の中性単数形「主格≠対格」—上部ドイツ語

指示詞標識としての語頭音 th/þ/d/t-を欠き，母音で始まる「母音系列」の人称代名詞中性単数形は，いつも肩身を狭くしているわけではない。ヨーロッパ本国で北部に分布するゲルマン諸語に対して，最南部に位置する上部ドイツ語には，無強勢のド es のほかに，強勢を持つ，「母音系列」の強調形がある。その西側を占めるスイスドイツ語チューリヒ方言の èès やベルン方言の äs などがそれで，人間，とくに子供・女性に使い，直示的意味も備えている。

(18)　強調形—基本形—弱形(以下は主語，カッコ内は標準ドイツ語の語形)[15]

	男性単数（er）	女性単数（sie）	中性単数（es/'s）	複数（sie）
チュ	èèr — èr — er	sii — si/se — s	èès — ès — es/s	sii — si/se — s
ベ	ăr/är — är — er	sii/si — si — Ø	ăs/äs — es — es/'s	sii/si — si — Ø

チュ Wèr isch ***es***?— ***Èès*** hät ***s*** gmacht.　それは (es) だれですか—その子 (こ

[15] 正書法には類書の間で差がある（チュ Gallmann 2015[3]: 183, Schobinger 2007[3]: 64, Weber 1987[3]: 159; ベ Pinheiro-Weber 2010[3]: 22, Marti 1985: 92, 1985[2]: 65 参照)。

そ）が（強調形 èès）それを（弱形 s）したのです（Gallmann 2015[3]: 183）

ベ Was seit de ächt ***äs*** derzue, wenn är geng näbenuse graset? 旦那（＝彼 är）がいつも（geng）浮気しているのに（wenn～näbenuse graset），それについて（derzue）いったい（de ächt，ド denn echt）あの彼女は（強調形 äs）何と（was）言っているのか（seit)?

（Von Greyerz/Bietenhard 1997[6]: 31）

スイスに関係する作家の作品には，人間を表す es を用いた「前置詞＋es」がよく登場する。(19) はその一例である。標準ドイツ語の es は無強勢なので，前置詞とは使わず，「R-代名詞」（R-pronoun）を用いて「da(r)-前置詞」とする。とくに北部ではその傾向が強い（Duden 2009[8]: 271）。

(19) ド Er trat zum Bett des Kindes hin und beugte sich ***über es***. 彼は子供のベットに近寄り，その子の上に（über es）身をかがめた

（Carl Zuckmayer 1896–1977, Eggeling 1961: 137）

さらに，チューリヒ方言やベルン方言では，3 人称代名詞単数中性形が強調形の場合に，主格と対格で語形が明確に異なる。これは印欧語全体としても非常に珍しい。印欧祖語の中性主格は対格からの転用なので，両者は同形のはずだからである。(20) の強調形は有生（人間，とくに女性・子供）の意味を表す。「チュ ins/ベ ihns」は「男性対格強調形 チュ inn/ベ ihn＋中性対格弱形 チュ s/ベ 's」の複合である（Weber 1987[3]: 159, Russ 1990: 377, Howe 1996: 275）。

(20) 3 人称代名詞中性単数

強調形—有生（人間，とくに女性・子供）：

チュ 主格 èès↔対格 ins　　ベ 主格 äs↔対格 ihns

弱形：チュ 主格 es/s～対格 s　　ベ 主格 es/s～対格 's

チュ Uf ***ins***, cha me si verlaa ! あの子/彼女なら（uf ins 強調形），（人は me）

信頼する（si verlaa，ド sich verlassen）ことができる（cha）！
（Weber 1987[3]: 159）

ベ Si hei gäng guet für ***ihns*** gsorget.　彼らは（si）常に（gäng）よく（guet）あの子/彼女の（für ihns 強調形）世話をした（hei～gsorget）
（Marti 1985: 94）

注意を要するのは，両者が人間を中心とする有生名詞，とくに子供と女性を指す点である。これは上部ドイツ語の西側を占める他のアレマン方言にも該当する。たとえばアルザス方言の éns も女性に限られ，普通は若い女性を表し，主文平叙文の文頭（前域）にも現れる（ｱﾙ ***Éns*** kènn i nét. [ɪns kʰɛn i nɪt][16] その子/彼女は私は知りません，Philipp/Bothorel-Witz 1990: 323）。バーゼル方言の強調形 ääs/基本形 äs も，対格 ins/ins ―与格 im（m）/im を含めて，人間（女の子など）や生き物に使う（Suter 1992: 77）。

一般にアレマン方言では人名に定冠詞をつけるが，女性名は親族名称を含めて，改まった場面以外では中性の扱いを受ける（ベ ***ds*** Anna アンナ（ベ ds＝ド das））。指小形による女性名もそうである（ベ ***ds*** Ann***i***/Ann***eli***/Änn***eli***/Muet***i***←Anna/Mueter 母）。一方，男性名の指小形は自然性が優先されて，男性の扱いのままである（ベ ***der*** Peter***li***/Vatt***i***←Peter ペーテル/Vatter 父，ﾁｭ ***de*** Hein***i***←Hein ヘイン（ﾁｭ de＝ド der））（Marti 1985: 81, Werner 1999: 67）。これは，女性が中性と結びつく西ゲルマン語の傾向の反映と言えよう（清水 2021a: 47–50）。

1–3–4.「h–系列」の中性単数形「主格≠対格」―フリジア語群

アルプスの麓（ふもと）から遠く離れた北海沿岸のフリジア語群でも，同様の現象が見られる。フリジア語群には「北海ゲルマン語的特徴」の一環で再帰代名詞がなく，人称代名詞で代用する。北フリジア語モーリング方言や西フリジア語では，再帰用法として用いた場合には，人称代名詞中性単数の主格と対

[16] アルザス方言のつづりは Brunner（2001）に準拠して示す。

格の語形は一致しない。再帰用法には「h-系列」の語形を用いる。

（21）　3人称代名詞中性単数：再帰用法

① モ 主格 dåt/hat/et/'t↔対格 ham　②西フ 主格 it/'t↔対格 him

① モ ***Dåt*** ferstoont ***ham***.　それは（dåt）自明だ（自分を（ham）理解する（ferstoont））（ド ***Das/Es*** versteht ***sich***.）　（清水 1992: 100）

Dåt luunt ***ham*** ai.　それは（dåt）やってもむだだ（自分を（ham）報いない（luunt ai））（ド ***Das/Es*** lohnt ***sich*** nicht.）　（ib. 102）

比較：Wan'm ***dåt*** for me düünj?　君たちは（'m←jam）それを（dåt，ド das/es）私のために（for me）やってくれるかい（wan～düünj）　（ib. 101）

Jü twoit ***dåt bjarn*** än tjucht ***et*** önj.　彼女は（jü）その子供（の体）を（dåt bjarn）洗い（twoit），その子に（et，ド es）服を着せる（tjucht～önj）（ド zieht es an）　Walker/Sjölin（1986: L 7.1）

② 西フ ｛***It waar/It***｝ hold ***him*** goed.　｛天気（it waar）/それは（it）｝よく（goed）持ちこたえた（hold him，ド hielt sich）　（清水 2006: 173）

比較：Ik wit ***it*** net mear.　私は（ik）それを（it）もう覚えていない（wit～net mear）（ド weiß ***es*** nicht mehr）　（Dykstra 2000: 818）

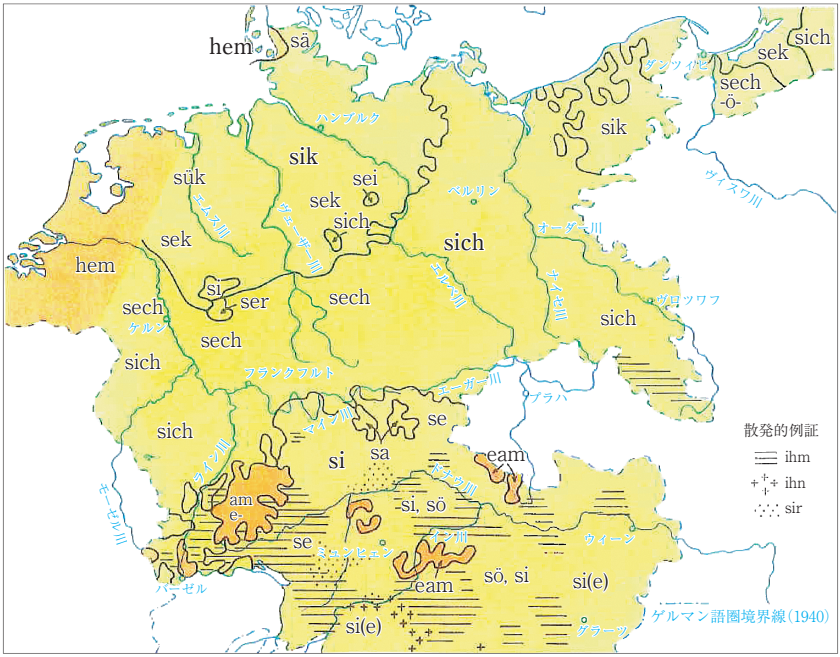
また，現在はほとんど廃れているが（Walker 1990: 17），伝統的なモーリング方言には，3人称代名詞中性単数主格形に有生（人間・動物）の hat があり，ham は hat の目的格だった。約1世紀前に書かれた Bauer（1925: 111）の文法書では，「3人称代名詞中性単数主格―目的格」の語形に hat ― ham だけを記している。ham（＜古フ him）と hat（＜古フ hit）は指示標識 h-を伴う「h-系列」の代名詞に由来し，英語の he/him と同系である。

（22）　3人称代名詞中性単数：有生（人間・動物）：モ 主格 hat↔対格 ham

モ ***Dåt bjarn*** schrait, ***hat*** koon ai släipe.　その子供は（dåt bjarn）泣き叫んでいる（schrait），その子は（hat）眠れない（koon ai släipe）

（Walker/Sjölin 1986: L 6.1）

図 2　再帰代名詞（ド Sein Bruder will *sich* zwei schöne Häuser bauen.）



（König 1998[12]: 155 変更）

※オランダ語圏の hem は方言レベルでの語形。標準オランダ語の zich は高地ドイツ語（ド sich）からの借用。

> ***Hat*** tjücht ***ham*** en jåk önj.　その子/彼女は（hat）上着を（en jåk）着る
> （tjücht ham～önj,　ド zieht sich～an）　（Petersen 2007: 176）

指示代名詞 dåt の進出を受けた人称代名詞 hat は，有生（人間・動物）の意味を帯びるようになった。清水（2021a: 47–50）で述べたように，男・女・中の 3 性を保つモーリング方言に対して，島方言に属する北フリジア語フェリング方言は「男性↔非男性」の 2 性である。フェリング方言では，かつての女性単数主格 jü/対格 hör が中性形 hat/ham「彼女，その子」に駆逐されて，中性形でありながら，やはり人間を表すようになった。そして，物事を表す

中性単数 det「それ」と対峙（たいじ）している（Ebert 1998: 269）。これは伝統的なモーリング方言の hat/ham「彼女，その子」と dåt「それ」の関係と同じである。さらに，これは（11）にあるように，大陸北ゲルマン語の den「それ（両性）」↔det「それ（中性）」に対する han「彼」↔hon/hun「彼女」に似ている。

フリジア語群には，「北海ゲルマン語的特徴」の一環として，古英語と同様に古くから再帰代名詞がない（**図表 2** 参照））。モーリング方言を始めとするフリジア語群では，古来の人称代名詞と指示代名詞の関係が「非再帰用法 dåt↔再帰用法 ham」の棲（す）み分けに反映しているのである。

参考文献

Åkerberg, Bengt (2012) *Älvdalsk grammatik. Under medverkan av Gunnar Nyström*. Ulum Dalska.

Bauer, Erika (1925) *Die Moringer Mundart. Laut- und Formenlehre nebst Sprachproben. Ein Beitrag zur nordfriesischen Dialektforschung*. Heidelberg: Winter.

Braune, Wilhelm/Ebbinghaus, Ernst, A. (1979[16]) *Althochdeutsches Lesebuch*. Tübingen: Niemeyer.

Braune, Wilhelm/Reiffenstein, Ingo (2004[15]) *Althochdeutsche Grammatik I. Laut- und Formenlehre*. Tübingen: Niemeyer.

Brunner, Jean-Jacques (2001) *L'alsacien sans peine*. Chennevières-sur-Marne Cedex: Assimil.

Cyriacks, Hartmut/Nissen, Peter (1998[2]) *Sprachführer Plattdüütsch. Ein Lehr- und Lernbuch*. Hamburg: Quickborn-Verlag.

Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014[4]) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.

Duden (2009[8]) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Dykstra, Anne (2000) *Frysk-Ingelsk wurdboek/Frisian-English Dictionary*. Ljouwert: Afûk/Fryske Akademy.

Ebert, H. Karen (1998) Genussynkretismus im Nordseeraum. Die Resistenz des Fering. In: Boeder, Winfried/Schroeder, Christoph/Wagner, Karl Heinz/Wildgen, Wolfgang (Hrsg.) *Sprache in Raum und Zeit. In memoriam Johannes Bechert. Bd. 2. Beiträge zur empirischen Sprachwissenschaft*. Tübingen: Narr. 269–282.

Eggeling, H. F. (1961) *A Dictionary of Modern German Prose Usage*. Oxford: Oxford

University Press.

Frings, Theodor/Lerchner, Gotthard (1966) *Niederländisch und Niederdeutsch*. Berlin: Akademie-Verlag.

Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Gallmann, Heinz (2015[3]) *Zürichdeutsches Wörterbuch*. Zürich: Verlag Neue Züricher Zeitung.

Herrmann-Winter, Renate (2006) *Hör- und Lernbuch für das Plattdeutsche*. Rostock: Hinstorff.

Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages. A Study of Personal Pronoun Morphology and Change in the Germanic Languages from the First Records to the Present Day*. Berlin/New York: De Gruyter.

ヴァインホルト, カール/エーリスマン, グスタフ/モーザー, フーゴー（井出万秀訳）(2017)『中高ドイツ語小文法　改訂第 18 版』郁文堂

Jespersen, Otto (1894) *Progress in Language with Special Reference to English*. London/NewYork: Swan Sonnenschein & Co./Macmillan & Co. (New Ed. with an Introd. by MacCawley, James D. (ed.). (1993) Amsterdam/Philadelphia. Benjamins.

Johannsen, Albrecht (1991 (1956)) *Beerid*. Bräist/Bredstedt. Nordfriisk Instituut.

König, Werner (1998[12]) *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969[7]b) *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.

Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. Leipzig/München: VEB Verlag Enzyklopädie/Hueber.

Lehmann, Winfred (1994) Gothic and the Reconstruction of Proto-Germanic. In: König/Van der Auwera (eds.) 19–37.

Marti, Werner (1985) *Berndeutsch-Grammatik für die heutige Mundart zwischen Thun und Jura*. Bern: Francke.

Marti, Werner (1985[2]) *Bärndütschi Schrybwys. Ein Wegweiser zum Aufschreiben in berndeutscher Sprache*. Bern: Francke.

Merkle, Ludwig (1990[4]) *Bairische Grammatik*. München: Hugendubel.

森田貞雄（1981）『アイスランド語文法』大学書林

Müffelmann, Friedrich (1970) *Althochdeutsch. Einführung in Grammatik und Literatur*. Bonn: Dümmler.

Niebaum, Hermann (1983) Die niederdeutschen Mundarten. Zur Formengeographie. In: Goossens, Jan (Hrsg.) *Niederdeutsch. Sprache und Literatur. Eine Einführung. Band 1:*

Sprache. Neumünster: Wachholtz. 158–174.
Petersen, Adeline (2007) *Friesischer Sprachkurs. Mooringer Frasch*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
Philipp, Marthe/Bothorel-Witz, Arlette (1990) Low Alemannic. In: Russ (ed.) 313–336.
Pinheiro-Weber, Ursula (2010[3]) *Bärndütsch. Ein Lehr- und Lernbuch*. Bern: hep verlag.
Russ, Charles V. J. (ed.) (1990) *The Dialects of Modern German*. London: Routledge.
Russ, Charles V. J. (1990) High Alemannic. In: Russ (ed.) 364–393.
Schobinger, Viktor (2007[3]) *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger Verlag.
Seebold, Elmar (1984) *Das System der Personalpronomina in den frühgermanischen Sprachen. Sein Aufbau und seine Herkunft*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
清水　誠（1992）「北フリジア語モーリング方言（1）．文法．V. Tams Jörgensen: *Kort spräkeliir foon dåt mooringer frasch* 訳注」『北海道大学文学部紀要』40–3．65–162.
清水　誠（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158 号．37–76.
清水　誠（2020）「ドイツ語から見たゲルマン語（2）―属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160 号．37–96.
清水　誠（2021a）「ドイツ語から見たゲルマン語（3）―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162 号．35–101.
清水　誠（2021b）「ドイツ語から見たゲルマン語（4）―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163 号．1–22.
Suter, Rudolf (1992[3]) *Baseldeutsch-Grammatik*. Basel: Christoph Merian Verlag.
Thies, Heinrich (2011[2]) *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholtz.
Thomson, Colin D. (1987) *Íslensk Beygingafræði/Isländische Formenlehre/Icelandic Inflections*. Hamburg: Buske.
Von Greyerz, Otto/Bietenhard, Ruth (1997[6]) *Berndeutsches Wörterbuch für die heutige Mundart zwischen Burgdorf, Lyss und Thun*. Muri bei Bern: Cosmos Verlag.
Walker, Alastair G. H. (1990) Frisian. In: Russ (ed.) 1–30.
Walker, Alastair/Sjölin, Bo (1986) *Frasch for önjfångere. Programmierter Lehrgang des Mooringer Friesisch*. Kiel: Nordfriesische Wörterbuchstelle der Christian-Albrechts-Universität Kiel.
Weber, Albert (1987[3]) *Zürichdeutsche Grammatik. Ein Wegweiser zur guten Mundart*. Zürich: Verlag Hans Rohr.
Werner, Ingegerd (1999) *Die Personalpronomen im Zürichdeutschen*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

10.14943/bfhhs.164.r1

『ほどほどの懸想』注解

後藤康文

一 ――小舎人童の恋――

【本文】（底本＝高松宮本）

祭のころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしき小家（こいへ）の半蔀（はじとみ）も、葵（あふひ）などかざして心地よげなり。童べの、袒（あこめ）、袴きよげにて、さまざまの物忌どもつけ、化粧（けさう）して、「われも劣らじ」といどみたるけしきどもにて行きちがふは、をかしく見ゆるを、まして、そのきはの小舎人（ことねり）・随身などは、ことに思ひとがむるもことわりなり。

とりどりに思ひわけつつ、ものいひたはぶるるも、「何ばかりはかばかしきことあらじかし」と、あまた見ゆる中に、いづくのにかあらむ、薄色着たる、髪は丈ばかりなる、頭（かしら）つき、容体（やうだい）などもいとをかしげなるを、頭の中将にさぶらふ小舎人童、「思ふさまなり」とて、いみじうなりたる梅の枝に、葵をかざして、取らすとて、

梅が枝にふかくぞ頼むおしなべてかざすあふひのねもみてしがな

といへば、

標（しめ）のなかの葵にかかる木綿（ゆふ）かづらくれどねながきものと知らなむ

と、おしはなちていふもされたり。

「あな、聞きにくや」

とて、笏（さく）して走り打ちたれば、

「そよ、そのなげきの森の、もどかしければぞかし」

など、ほとほどにつけては、かたみに「いたし」など思ふべかめり。そののち、つねに行き逢ひつつも語らふ。

【注解】

○**今めかしう**―形容詞「今めかし」は、この物語の明るく清新な基調を象徴するキーワード。のちにもう一度用いられる。○**心地よげなり**―「あやしき小家の半蔀」を主語とする擬人法。賀茂祭を間近に控えた華やぎが、京の隅々にまで満ち溢れる様子をうまく表現している。○**まして**―情景を俯瞰する語り手の私にもまして、の意。○**思ひとがむる**―「とがむる」は底本ほか主要諸本「とかめる」。「とがめる」は平安文法では説明不能であるため、「め」を「む」に訂正した。おそらく下二段動詞が下一段化した、後代の言語状況を反映しての転化だろう。清水浜臣自筆本等末流本文「とかむる」。○**いひたはぶるる**―底本「いひたはふる」で「る」に「ル」の傍記。下二段活用の複合動詞「いひたはぶる」は係助詞「も」に接続する関係上、ここでは連体形でなければならない。よって、他本により「る」一字を

補った。○**はかばかしきことあらじかし**―たいして成果もあるまいよ。「あらじ」は底本ほか諸本「ならし」だが、「な（奈）」は「あ（阿）」の誤写とみて改めた。参考「まことは、かやうの御歩きには、随身からこそはかばかしきこともあるべけれ、後らさせたまはでこそあらめ」（『源氏物語』末摘花巻）「泣かせたまへど、はかばかしきこともなし」（『栄花物語』後くゐの大将）など。「はかばかしきこと」は「なる」かならないかではなく、「ある」かないかなのである。○**髪は丈ばかりなる**―髪の長さは身長ほどである。「丈」は底本ほか諸本「き」だが、すでに指摘されているように、漢字「丈」→仮名「き（支）」の誤写。また、「なる」も現存諸本すべて「ある」のようだが、前項とは逆に、「あ（阿）」は「な（奈）」の誤りとみるべきである。参考「髪はつややかにて、いとううつくしげにて、たけばかりなり」（『はいずみ』）「髪、色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにてたけばかりなりければ」（『枕草子』「野分のまたの日こそ」の段）など。○**頭の中将にさぶらふ小舎人童**―頭の中将にお仕えする小舎人童。「にさぶらふ」は、底本ほか諸本「の御」。このままでは「頭の中将の御小舎人童」となって不可解であるため、「の（乃）御」は「に（爾）候」の誤りとみて改めた。後出の「君の御方に若くてさぶらふ男」と同じ筆法。なお、あとで改めて触れるが、「若くてさぶらふ男」の部分も底本ほかで「わかくて御おとこ」とあるのは、たいへん興味深い現象である。○**いみじうなりたる梅の枝**―たいそう実の生った梅の枝。季節的に造り物であろう。小舎人童が予め用意していた粋な小道具。実る恋を暗示すると同時に、梅の実＝「酸きもの」＝「好き者」の意も込めるか。○**木綿かづら**―神事に用いる木綿鬘から、つる草の蔓を導く。○**おしはなちていふ**―「いふ」は底本ほか主要諸本で「いらふ」に作る。しかし、「いらふ」は下二段活用の動詞であるため、正しくは「いらふる」とあるべきである。よってここでは、「い」と「ふ」の連綿箇所が誤って「ら（良）」に読まれたものと判断して、清水浜臣自筆本等末流本文と同形の「いふ」を正当な本文と位置づける。

和歌はそもそも「いふ」ものであるし、前文の「いへば」ともうまく整合することになる。

【現代語訳】

賀茂祭の時節は、（京中の）ものみなすべてが華やかに見えるのであろうか、みすぼらしい小さな家の半蔀までもが、（この時だけは）双葉葵などを挿して気分爽快なようである。

（下仕えの）女の子たちが、袙や袴をこざっぱりと着て、いろいろな物忌札なんかをつけ、おめかしをして、（銘々が）「私だって（ほかの子に）負けてないわ」とライバルを意識した様子で往来をすれ違う姿は、（傍観者の目にも）おもしろく映るのに、ましてや、同じ階層の（異性である）小舎人童や随身などは、（そんな彼女たちを）とりわけ気にとめるのも当然である。

（男の子たちが）思い思いに（目指す）相手を決めては、冗談めかして口説くのも、「たいしてうまくいくこともあるまいよ」と、たくさん（の組み合わせが）見える中で、どこの（お屋敷の使用人）であろうか、（まず、）薄紫色（の着物）を着ている、（そして、）髪（の長さ）は身の丈ほどである、（なおかつ、）髪形や体形などもとてもかわいらしい感じの女童を、頭の中将にお仕えする小舎人童が「理想のタイプだ」と思って、たいそう（多数の実が）なった梅の枝に、葵（の葉）をかけて、（その子に）贈るということで、

この梅の枝のごとくあなたとへの思いが実を結ぶように、また、たわわになった梅の実が「酸きもの」すなわち「好き者」を暗示するごとく、あなたが色恋に手馴れた方であるようにと、心底願っているのです。みんなが頭に飾る葵のその名のとおり、あなたと逢う日を迎えて、葵の（葉のみならず）根も見てみたい、否、あなたと（是

非）寝てみたいものです。

と告白すると、（相手の女の子は、）

（神聖な賀茂社の）標縄の中の葵に這いかかる木綿鬘、いいえ木綿蔓は、いくら手繰っても手繰りきれないほど根が長いものとご承知おきください。（標の中の葵のように）穢れを知らぬ私に（対し、「色好み」だなんてとんだ見当違いをなさって、蔓のようにしつこく）まとわりついてくるあなたは、いくらやって来ても（無駄骨で、私と）共寝するのは（蔓の根がとっても長いように）遥か先のことだとわかってくださいな。（お生憎さま。そう簡単にあなたの思いどおりには行きませんことよ。）

と拒絶するのも機転が利いている。（それを聞いた小舎人童は、）

「ああ、聞き辛い（ご返事だ）なあ（まったく）」

といって、（手に持っていた）笏で走って（行って女童を）ぶったので、

「（ほら）そこよ。（思いどおりの返事がもらえないからといって、私を「投げ木」ならぬ笏でぶつような）あなたの（「嘆きの森」、すなわち）仰山な落胆の態度が（私の）気に障るんですよ。（性急で無神経な方ね。）」

などと（ことばを交わして）、身分の釣り合った者同士で、お互いに（相手のことを）「もう惚れ惚れ」などと思っているように見える。（となれば、もはや時間の問題で、）その後、（小舎人童が）いつも通って行って共寝をしつつ（二人であれこれと）語り合う（のであった）。

【余説】

賀茂祭（葵祭）は当時の人々が楽しみにして待った年間最大の行事であった。その時節が訪れて「今めかし」さに包まれた京のありさまが、語り手の視点をとおして描き出される『ほどほどの懸想』の冒頭場面は、先学も指摘するように、『枕草子』の次の二つの記事を念頭に置いているものと思われる。

①四月、祭のころ（中略）、祭近くなりて、青朽葉、二藍の物ども押し巻きて、紙などけしきばかりおし包みて行きちがひ持てありくこそをかしけれ（中略）。童べの、頭ばかり洗ひつくろひて、なりはみなほころび絶え、乱れかかりたるもあるが、屐子、沓などに、「緒すげさせ、裏をさせ」などもてさわぎて、いつしかその日にならなむといそぎおしありくもいとをかしや。あやしうをどりありく者ども、装束きしたつれば、いみじく定者などいふ法師のやうに、練りさまよふ、いかに心もとなからむ。ほどほどにつけて、親、をばの女、姉などの、供しつくろひ率てありくもをかし。

（「ころは」の段）

②つちありく童べなどの、ほどほどにつけて、いみじきわざしたりと思ひて、常に袂まぼり、人にくらべなど、えもいはずと思ひたるなどを、そばへたる小舎人童などに引きはられて泣くもをかし。

（「節は」の段）

なお、ここまでは、上中下三階層のうちもっとも身分が低い小舎人童と女童の、出会い（＝「いひよる」段階）から交際（＝「あふ」段階）に至るさまが、軽快かつ鮮やかに叙述されている。

二　――語らい――

【本文】

いかになりにけむ、失せ給ひにし式部卿の宮の姫君の中になむ、さぶらひける。宮などとく隠れ給ひにしかば、心細く思ひなげきつつ、下わたりに、人少なにて過ぐし給ふ。上は、宮の失せ給ひける折、さま変へ給ひにけり。姫君の御かたち、例のことといひなから、なべてならずねびまさり給へは、「いかにせまし。内裏などにおぼし定めたりしを、今はかひなく」などおぼしなげくべし。

この童、来つつ見るごとに、頼もしげなく、宮のうちも、さびしくすごげなるけしきを見て、語らふ。

「まろが君を、この宮にかよはし奉らばや。まだ定めたる方もなくておはしますに、いかによからむ。ほどはるかになれば、思ふままにも参らねば、『おろかなり』ともおぼすらむ。また、『いかに』とうしろめたき心地もそへて、さまざま安げなきを」

といへば、

「『さらに今は、さやうのこともおぼしのたまはせず』とこそ聞けば」

といふ。

「御かたち、めでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、飽かぬところおはしまさむは、いと口惜しからむ」

といへば、

「あな、あさまし。いかでか。見奉らむ人々のたまふは、『よろづむつかしきも、御前にだに参れば慰みぬべし』とこそのたまへ」

と語らひて、明けぬれば去ぬ。

【注解】

○**失せ給ひける折**―底本「うせ給けるにをり（をりに歟）」とあるのを、三手文庫本等により改めた。これは「に」を衍字とする考え方だが、別途「に」と「をり」の転倒を想定して、「失せ給ひける折に」を本来的な形とみることもできる。○**例のこと**―物語の設定としては定石、の意。末摘花のような例外はあるものの、零落した名家の姫君は絶世の美女である、というのが物語のお約束。○**おろかなり**―底本ほか諸本「をろかなる」。「なる」の下に「こと」等の省略を想定するなら、連体形もかろうじて容認できようが、ここはやはり、「り（利）」→「る（留）」のありふれた誤写による転化本文とみて、終止形「なり」に改めるべきであろう。参考「げにおろかなりとも思いてむ」（『源氏物語』野分巻）「おはしまさぬ、おろかなりと、人思ふべきにあらず」（『夜の寝覚』巻二）「我ながら心憂く、おろかなりとおぼえしや」（同巻四）など。○**さやうのこと**―姫君の結婚。人的・経済的基盤を喪失した今や、入内はおろか貴族の子弟との結婚も諦めざるをえないのである。○**とこそ聞けば**―以上が女童より上位の、女房階層から得た情報であることを表す。○**とこそのたまへ**―ここも、主人を「見奉らむ人々」、すなわち女房たちから聞いた間接的情報であることを表している。女童が姫君と直に接することはないのである。

【現代語訳】

（ところが、いったい何が）どうなったのだろうか、（女童は、いつからか出仕先が変わって、）亡くなってしまわれた式部卿の宮の姫君（に仕える人々）の中に（交じって）奉公していたのであった。（父）宮などは早くにお亡くなりになってしまったので、（姫君は）物心ともに不如意である現況に心を砕きながら、（上京にくらべるとさびれた）下京あたりに、お仕えする人も少ない状態で過ごしておられる。北の方は（というと）、宮が逝去された折に、落飾し（尼になっ）てしまわれた。姫君のご容貌は、（物語の設定として）いつものこととはいえ、並一とおりでなく（美しく）日に日にご成長なさるので、（尼上が）「どうしたものかしら。（宮は生前、姫を）入内させると心に決めていらしたのに、（故人となった）今はそのお気持ちも虚しく」などと、嘆き悲しんでおられるのも当然だろう。

この（小舎人）童は、やって来ては見るたびに、頼もしい様子がなく、お屋敷の中もひっそりとして荒涼たるありさまであるのを目にして、（女童に）話をもちかける。

「僕のご主人を、このお屋敷に通わせ申し上げたい。（幸い）まだ正妻もなくていらっしゃるので、（実現すれば）どんなに良いことだろうか。（以前より）距離が遠くなってしまったので、（ここに）思いどおりに参上するわけにもいかないので、（君は）『（僕の）愛情が足りない』とでも思っていらっしゃることだろう。また（僕は僕で）、『（君が）どうしているだろうか』と不安な気持ちも加わって、あれこれと心穏やかではないので」

というと、

「『（尼上は、こんなに落ちぶれ果てた）今（となって）は、まったくそのようなことをお思いになって口に出されることもありません』と聞いているので（、そんなお話はとてもとても。）」

という。（すると、小舎人童は構わず、）

「（ところで、姫君の）ご器量は、文句なくていらっしゃるかい。どれほど血筋のいい（家系の）お嬢様方だとしても、（当のご本人に）満足できないところがおありだとしたら、たいそうがっかりだろう」

というので、

「まあ、呆れた。（よりによってご器量不足だなんて、）どうしてそんなことがありましょうか。（姫君を）お世話申し上げるような（お立場の）人々がおっしゃるには、『何かつけ気の塞ぐこと（があって）も、御前にさえ参上すれば、（すっと）楽になること請け合いです』ともっぱらおっしるわ」

と（睦言がてら）話を交わして、夜が明けたので（小舎人童は）辞去する。

【余説】

経緯は不明ながら、女童は奉公先を変えて、荒れ果てる一方の故式部卿の宮邸にお仕えすることになった。そこで、通い先が遠くなり恋人と頻繁に逢えなくなった小舎人童は、それぞれの主人同士、頭の中将と姫君を縁づけてしまえばよいと、一石二鳥の打開策を持ちかけるのであった。

姫君に直接仕える女房たちの証言「よろづむつかしきも、御前にだに参れば慰みぬべし」は、『竹取物語』冒頭部の、

この児のかたちの顕証なること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。

をおのずと連想させる。故式部卿の宮の姫君が「かぐや姫」にも比肩する類まれな美女であることを暗示していよう。

三　――若い男の恋――

【本文】

かくいふほどに、年も返りにけり。君の御方に若くてさぶらふ男、好ましきにやあらむ、定めたる所もなくて、この童にいふ。

「そのかよふらむ所はいづくぞ。さりぬべからむや」

といへば、

「八条の宮になむ。知りたる者さぶらふめれども、ことに若人あまたさぶらふまじ。ただ中将、侍従の君などいふなむ、『かたちもよげなり』と聞き侍る」

といふ。

「さらば、そのしるべして伝へさせよ」

とて、文取らすれば、

「はかなの御懸想かな」

といひて、持て行きて取らすれば、

「あやしのことや」

といひて持てのぼりて、

「しかじかの人」

とて見す。手もきよげなり。柳につけて、

したにのみ思ひ乱るる青柳のかたよる風はほのめかさずや

「知らずはいかに」

とある。

「御返事なからむは、いと古めかしからむ。今様は、なかなかはじめのをぞし給ふなる」

などぞ、笑ひてもどかす。少し今めかしき人にや、

一筋に思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞ乱るらむ

今様の手の、才あるに書き乱りければ、「をかし」と思ふにや、まもらへてゐたるを、君、見給ひて、うしろよりにはかに奪ひ取り給ひつる。

【注解】

○**年も返りにけり**―物語第二年目、恋の季節春を迎える。○**君の御方に若くてさぶらふ男**―底本ほか「君の御かたにわかくて御おとこ」に作るが、圏点を付した漢字「御」は漢字「候」の明白な誤り。よって、三手文庫本等により本文を改めた。この錯誤は、先に述べた誤写説＝「頭の中将の御小舎人童」→「頭の中将に候小舎人童」を裏づける、願ってもない内部証拠となるはずである。○**さりぬべからむや**―（そのお屋敷には）器量よしの若い女房はいるか、の意。○**さぶらふめれども**―底本「さふらめれとも（本ママ）」。三手文庫本等によって改めた。「さぶらへども」とあり体に述べても

よいところを、婉曲の助動詞「めり」を用いることによってわざと曖昧に表現した。○**さぶらふまじ**―この「まじ」は、零落した式部卿の宮家に、そもそも器量がよく年も若い女房が多く仕えているはずがない、という世間的相場を前面に押し出す表現。○**しるべ**―女童を指す。○**あやしのことや**―奇妙な話だわ。「あやし」は、自分には理解不能な事態・行動・現象等に直面した当惑を表す形容詞。この場合は、若い男のあまりに唐突な求愛を、解せないことと受け止める女童の心理を表現している。○**手も**―手紙の料紙のみならず筆跡も、の意。手紙の主が洗練された魅力的な男性であることを暗示。○**かたよる**―（青柳の）糸を一定方向にばかり撚りかける意の「片撚る」に、特定方向（すなわちあなたの方）にばかり吹き寄せる意の「方寄る」を掛ける。○**知らずはいかに**―「知るや君知らずはいかにつらからむわがかくばかり思ふ心を」（『拾遺集』恋二・よみ人知らず）の第二句を引いたもの。○**今様は**―底本「いまやう〳〵は」とあるのが、踊り字「〳〵」を直後の「中〳〵」が誘因となった衍字とみて削除し、三手文庫本等と同形の本文に改めた。○**はじめのをぞ**―底本「はしめのをう（本マヽ）」。「う（宇）」は「そ（曽）」の単純な誤写。三手文庫本等により改めた。「はじめの」は初回の恋文の意で、返事をしないのが通例。○**し給ふなる**―「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。（聞くところによれば、）世間では～ようだ、の意。○**などぞ**―底本「なとう（本マヽ）」。先ほどと同じく「う」は「そ」の誤写。高松宮本等の祖本書写者には、どうやら「そ（曽）」の字を「う（宇）」に写し間違える癖があったらしい。よってここも、三手文庫本等により改めた。○**もどかす**―年長の者が年少の者をからかう、などの意。この語は他の文献には見えないようだが、現在も宮崎県宮崎市などに方言として生き残っている。○**今めかしき人**―進取の気風に富む人。モダンな女性。○**風に**―底本「風よ（に歟）」。「よ（与）」は「に（爾）」の単純な誤写。三手文庫本等により改めた。○**書き乱り**―「書き乱る」は、意識して丁寧に書くのではなく、さっと書き散らすほどの意を表す四段動詞。参考「古

言など、もの思はしげに書き乱りたまへる、御手なども見どころあり」（『源氏物語』夕霧巻）「筆にまかせて書き乱りたまへるしも、見どころありをかしげなり」（同浮舟巻）など。○**まもらへて**―底本「まもとへて（本マヽ）」。「と（止）」は「ら（良）」の単純な誤写。三手文庫本等により改めた。「まもらふ」は、凝視する意の動詞「まもる」に状態の継続を表す助動詞「ふ」が接合した語で、長時間目が釘づけになっている様子を表現。

【現代語訳】

こういっているうちに、新年を迎えてしまった。頭の中将のお住いに（まだ年）若くてお仕えする男が、色好みな（質な）のだろうか、（ある時）この（小舎人）童にいうには、

「おまえが（今）通っている所はどこ（のお屋敷）だ。しかるべき（女房がいる）様子かい」

というと、

「八条の（故式部卿の宮の）お屋敷です。（私が）知っている者がお仕えしているようですが、とりわけ若い女房が数多くお仕えするはずもありますまい。ただし、中将（の君）や侍従の君などという方々は、器量も良さそうだと聞いております」

という。

「それならば、その仲介役を通じて（俺の胸の内を）伝えさせろ」

といって、（すぐさま）恋文を渡すので、

「（いやはや、まったく）お手軽な恋ですね」

といって、（女童のもとへ）持って行って託けたところ、（女童は、）

「奇妙な話ね」

といって（女房たちのいる所に、その手紙を）持参して、

「これこれこういう方（からの、突然のお手紙）です」

といって見せる。（さて開けてみると、紙はもちろん）字もきれいである。（その手紙は、季節にふさわしい）柳の枝に（結び）つけてあって、

下へ下へと乱れて延びる青柳の糸を片方にばかり撚り合わせるように、もっぱらそちらに向かって吹き寄せる（春）風は、私が心中に秘めたやるせない恋の悩みをそれとなくお伝えしないでしょうか。

「もしお気づきでなければ（どんなに辛いことでしょう）」

としたためてある。（すると、古参の女房が、）

「お返事がないのは、たいそう古風（に過ぎる）でしょう。今時（の流儀で）は、むしろ最初の（お手紙に対する）お返事を（皆さん）なさるそうです」

などと（いって）、笑ってからかう。（当事者の若い女房も、）少し当世風の（気質をもった）人なのだろうか、（さっそく、）

一筋に撚ら（れ）ない青柳の糸のように、一人の女性だけに思いを寄せることもない（多情な）あなた様は、その時々のお気持ちに任せて（あの人この人と）さぞかし思い乱れていらっしゃることでしょうね。

（と、返歌を）流行りの書体で、（いかにも）才気ある風に走り書きにしたところ、（それを手にした若い男は、）「（こ

れは）おもしろい」と思うのだろうか、じっと見つめて（座って）いたのを、頭の中将様がご覧になって、背後からいきなり取り上げなさる。

【余説】

頭の中将に仕える若い男が、小舎人童から取得した情報をいち早く活用して、故式部卿の宮家の若い女房（中将の君または侍従の君）に「いひよる」段階から、首尾よく「いひつく」段階までが描かれる。小舎人童の恋とは違って、いかにも手馴れた遊戯的様相を呈する恋と評せようか。

さて、ここで重要なのは、荒廃した邸内で不如意な日々を送っている宮の女房たちが、さぞ暗澹たる雰囲気で集っているものと思いきや、予期に反して、生き生きとした明るさに包まれている点なのである。冒頭部で用いられた本作の基調「今めかし」が、ここにおいて再度現れるのはとりわけ象徴的であるし、加えて「今様」という語も二度使われる。姫君を直に取り囲む人々は皆、進取の気風に富み、ハイカラで、どこまでも朗らかなのだ。

四　――頭の中将の恋――

【本文】

「誰がぞ」

と抓(つ)み捻り、問ひ給へり。

「しかじかの人のもとになむ。なほざりにや侍る」
と聞ゆ。「われも、いかでさるべからむたよりもがな」とおぼすあたりなれば、目とまりて見給ふ。
「同じくは、ねむごろにいひおもむけよ。もののたよりにもせむ」
などのたまふ。
童を召して、ありさまくはしく問はせ給ふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひ聞ゆれば、「あはれ、故宮のおはせましかば。さるべき折はまうでつつ見しに」とよろづ思ひあはせられ給ひて、「世のつねに」などひとりごたれ給ふ。わが御うへも、はかなく思ひつづけられ給ふ。
いとど世もあぢきなくおぼえ給へど、また、「いかなる心の乱れにかあらむ」とのみ、つねにもよほし給ひつつ、歌などよみて問はせ給ふべし。「いかでいひつきて」などおぼしけるとかや。

【注解】

○**抓み捻り**―相手のからだをふざけて抓ることだが、主従関係を超えた二人の親密さ、頭の中将のいかにも若者らしい気質が読み取れる。○**なほざりにや侍る**―気持ちのこもっていない返事でしょうか、の意。中将の気を逸らそうとしたのである。○**もののたより**―恋文の仲介役。○**問はせ給ふ**―「問はせ」の「せ」は使役。頭の中将は、仲介者（＝若い男）を通じて小舎人童から詳細な情報を得るのである。○**まうでつつ見しに**―底本「まうてゝ（本ママ）、つゝみしに」。主要諸本「まうてゝ」に作るが、踊り字「ゝ」は、下の「つゝ」に惑わされた明らかな衍字。なお、この前後の記述と頭の中将の年齢からして、式部卿の宮の逝去は、実際にはさほど昔のことではなったと推察される。○**とよろづ**―底

本以下諸本本文「もよろつ」だが、これでは意味不通であるため、「も（毛）」は「と（止）」のありふれた誤写とみて改めなければならない。「と」は直前の心中思惟を受ける引用の格助詞。○**世のつねに**―引歌未詳。○**もよほし**―「もよほす」は、促す、急き立てるなどの意を表す四段他動詞。頭の中将が、若い男に手紙を届けるよう催促するのである。○**問はせ給ふべし**―「問はせ」の「せ」は、前例と同じく使役の用法。若い男に、交際相手のいる故式部卿の宮邸を訪問させるのである。○**いかでいひつきて**―底本以下諸本「いかていひつきし」。「し」をそのまま認めれば、過去の助動詞「き」の連体形と解さざるをえないけれども、文意がおかしなことになるし、文法的破綻も明らか。よって、「し（之）」は「て（天）」のよくある誤写とみて、本文を「いかでいひつきて」に改めた。頭の中将の高鳴る胸中を、「どうにか（姫君からの）お返事をもらって…」といいさしの形で表現して、本作は鮮やかに完結する。

【現代語訳】

「（いったい）誰（から）の（手紙）だ」

と、（頭の中将は、若い男を）抓って詰問なさる。（若い男はそれに答えて、）

「しかじかの人のもとに（手紙をやったのです）。（これは脈なしの）気持ちのこもっていない返事でしょうか」

と申し上げる。（頭の中将は、）「自分も、何とかして恋文を届けられるような橋渡しがあればなあ」と（かねてから）お思いのあたりだったので、（奪った手紙におのずと）目が留まって（じっと）ご覧になる。（そして、男に、）

「どうせなら、（この女房を）熱心に口説いて靡かせろ。（姫君に宛てた）恋文の仲介役にでもしよう」

などとおっしゃる。

（そのあとで、小舎人）童をお呼び出しになって、（お屋敷の）現状を詳細に訪ねさせなさる。（小舎人童が、）包み隠さず、心細げなありさまをお話し申し上げると、（それを聞いた頭の中将は、）「ああ、故（式部卿の）宮がご存命であったならば（そんなことには…）。（私もかつて、機会あるごとに）うかがっては（立派なお屋敷のご様子を、この目で）拝見したのに」と、さまざまな場面が自然と思い出されなさって、「世のつねに」などと（いう歌の一句が）ひとりでにお口から漏れる。（さらに、）ご自身の身の上まで、いつかは潰えるものよと思いつづけられなさる。

（頭の中将は、日頃から無常を観じておられるので、）ますますこの世も無益なものにお感じになるけれど、（それはそれとして）また、「（いったい）何ゆえの惑乱であろうか」とばかり（に、故式部卿の宮の姫君への想いが募り）、しょっちゅう（若い男を）急き立てなさっては、（求愛の）歌などを詠んで（故宮邸を）訪ねさせていらっしゃるのだろう、「どうにかお返事をいただいて…」などとお思いになっていらした、とかいう話だ。

【余説】

小舎人童を利用して故式部卿の宮家の若い女房にまんまと「いひつ」いた若い男であったが、そこへ主人頭の中将が登場し、今度は彼が若い男を利用してかねてより関心のあった宮の姫君に「いひよる」算段をする。そして、「今めかし」さに貫かれたこの佳品は、頭の中将の期待に胸をときめかせる描写で締め括られる。小舎人童の「あふ」ステージに達した恋が若い男の「いひつく」ステージに至る恋を引き出し、さらにそれが頭の中将の「いひよる」緒に就いた恋を導くという、『ほどほどの懸想』の有する〝ピラミッド状〟の構成はまことに見事というほかない。

ところで、「あはれ、故宮のおはせましかば」から「わが御うへも、はかなく思ひつづけられ給ふ」までの、頭の中

将が無常に浸る叙述をもってして、彼を厭世観に囚われた虚無的人物と決めつけるのはとんでもない誤解である。物語に登場する上流貴族ならば、人の世のはかなさを思い知らされる報に接してこのような繊細な感受性が発露するのは、むしろ当たり前の話だからだ。主人公頭の中将は、あくまでも一個の恋する青年なのであり、姫君への恋の成就を一途に冀う一人の若者でしかないのである。

執筆者紹介

浅沼敬子（芸術学）
清水誠（言語科学）
後藤康文（日本古典文化論）

北海道大学 **文学研究院紀要** 第一六四号

令和3年7月16日　発行

編集者
北海道大学文学研究院長
藤田健

発行者
北海道大学

㈱アイワード

CLXIV (No. 164) July 2021

Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University

CONTENTS

Shooting memories and the future of the land
Photographs by Keiji Tsuyuguchi
..... Keiko ASANUMA (Left) 1

German as a Germanic Language (5)
— Personal Pronouns —
..... Makoto SHIMIZU (Left) 19

A Commentary on *Hodohodo no Keso*
..... Yasufumi GOTO (Right) 1

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University